鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡

手取川水道用水供給事業に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書

1981

石川県立埋蔵文化財センター

鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡

手取川水道用水供給事業に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書

1981

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は石川県石川郡鶴来町白山町に所在する白山遺跡・白山町墳墓遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、手取川水道用水供給事業に係る導水管埋設工事に伴なう緊急発掘調査事業で、調査事業費および遺物整理費、報告書刊行費は石川県企業局水道建設課が予算措置を行った。

3．本遺跡の分布範囲確認調査および全面発掘調査は、石川県企業局の調査委託を受けた石川県立埋蔵文化財センターが実施し、㈱小山組・㈱丸石建設の協力を受けた。

4．本遺跡の分布範囲確認調査は、1979年７月23日から同年８月10日にかけて９日間実施し、全面発掘調査は同年８月29日から同年11月９日まで行った。

5．出土品の整理は、石川県埋蔵文化財協会が行った。（遺物実測・トレース――上庄由美子、小谷紀美子、仁科洋子、小嶋裕子、尾田裕子、小屋玲子、森岡かがり、斎藤和代、樫見敦子）

6．発掘および遺物整理にあたって、次の各位の御教示を賜った。
三上次男（東京大学名誉教授）、高堀勝喜（石川考古学研究会々長）、吉岡康暢（県立郷土資料館資料課長）、四柳嘉章（県立宇出津水産高校教諭）、滋井　真（石川考古学研究会幹事）。

7．発掘調査は西野秀和（県立埋蔵文化財センター非常勤嘱託）が担当し、滋井　真の協力を得た。また、調査協力員は駒井相子、土井原富美子、松本いよ、谷口ヒサ子、伴　初枝（白山町有志）、森　輝代、中谷喜代子、正札静子、山岸久枝、正札正治、村本誠誉、山岸伊作、中谷勇作、山口甚右エ門、横山菊枝、川田はつ、高田なお（㈱小山組）南　尚栄、中村イサ、橋本玉子、石田佳子、小高叉三郎、山岸ひさえ、浦　シズ、南　美津枝、安本とし子、東　なつ子、下道芳子、吉田愛子、浦　庄吉（㈱丸石建設）であった。記して、謝意をあらわしたい。

8．本書の執筆・編集は、橋本澄夫（石川県立埋蔵文化財センター次長）、平田天秋、田島明人（同センター主事）の助言を受け、浅田耕治、西野が行った。なお、Ⅰ、位置と環境を浅田が執筆した他は、西野が行った。

9．本遺跡の遺構実測図、写真、出土遺物等の資料は県立埋蔵文化財センターが一括して保存管理にあたっている。なお、多数のスライドを撮影したので、利用願えれば幸いである。

目　　次

I　遺跡の位置と環境…… 1

II　調査に至る経緯…… 2

III　層序と遺構の配置…… 6

　1　試掘調査…… 6

　2　層序と遺構の配置…… 8

IV　遺　　構……12

　1．石段状遺構　　2．溝状遺構　　3．1号配石址　　4．2・3号配石址

　5．4号配石址　　6．5号配石址　7．26・27Gピット群

V　遺　　物……17

　1．縄文時代の遺物　　2．古代の遺物　　3．中・近世の遺物

VI　ま と め……35

挿図目次

第1図　周辺の遺跡（1／25,000）…… 2

第2図　遺跡の地形図（1／ 3,000）…… 4

第3図　遺構配置図（I）（1／ 500）…… 8

第4図　遺構配置図（II）（1／ 500）…… 9

第5図　1～8G土層断面図（1／80）……10

第6図　9～24G土層断面図（1／80）……11

第7図　1・2G石段状遺構実測図（1／80）……12

第8図　1号配石址実測図（1／40）……13

第9図　2・3号配石址実測図（1／60）……14

第10図　4号配石址実測図（1／60）……14

第11図　5号配石址実測図（1／40）……15

第12図　26・27Gピット群実測図（1／60）……16

第13図　縄文式土器・石器・土師器・須恵器実測・拓影図（1／3、1／2）……19

第14図　珠洲焼壺・甕実測・拓影図(1)（1／3）……21

第15図　珠洲焼鉢実測・拓影図(2)（1／）……22

第16図　珠洲焼鉢実測・拓影図(3)（1／3）……23

第17図　越前焼・加賀古陶実測・拓影図（1／3）……24

第18図　青磁・青花・瀬戸・唐津焼実測図（1／3）……26

第19図　土師質土器実測・拓影図(1)（1／3）……28

第20図　土師質土器拓影図(2)（1／3）……30

第21図　瓦器実測・拓影図（１／３）……30
第22図　古銭拓影図（１／１）……31
第23図　石造遺物実測図(1)（１／４）……32
第24図　石造遺物実測図(2)（１／４）……33

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧表……3
第２表　出土遺物一覧表……17
第３表　陶質土器一覧表……20
第４表　珠洲焼時期別一覧表……20
第５表　土師質土器計測表……29

図版目次

巻頭図版　青磁・白磁・青花・天目・瀬戸
図版１　遺跡周辺の航空写真（株式会社セントラル航業撮影）
図版２　遺跡遠景（舟岡山城をのぞむ）、遺跡遠景（南をのぞむ）
図版３　１・２Ｇの石段状遺構（北から）、同左（西から）
図版４　７・８Ｇの作業風景（北から）、７Ｇ溝状遺構（北から）
図版５　遺跡北部発掘風景（南から）、同左
図版６　遺跡北部遠景（南から）、２・３号配石址（北から）
図版７　１号配石址（東から）、２・３号配石址（西から）
図版８　27Ｇのピット群、24Ｇ南断面
図版９　９～13Ｇの検出状況（南から）、４号配石址（西から）、５号配石址
図版10　22・23Ｇの検出状況（西から）、20～23Ｇの検出状況（北から）、同左
図版11　地輪・宝輪・石臼・石鉢・珠洲焼・土師質土器の出土状況
図版12　縄文時代の石器、縄文時代の土器と石鏃
図版13　珠洲焼壺・甕、同左鉢
図版14　珠洲焼鉢底部、同左甕胴部
図版15　越前焼、瓦器
図版16　青磁・白磁・青花・天目・瀬戸の陶磁器
図版17　土師質土器、近世唐津焼
図版18　砥石・宝輪・地輪・火輪
図版19　地輪・石鉢・石臼
図版20　中世墓の発掘調査以前の状況（西から）、中世墓の全景（西から、昭和55年度調査）
図版21　縄文時代の集落址（南から）、墓道（南から）（昭和55年度調査）
図版22　発掘区全景（昭和55年度調査南区域）、石室全景（昭和55年度調査）

Ⅰ　遺跡の位置と環境

白山遺跡・白山町中世墳墓遺跡は、石川県金沢市の南に位置し、市街地より直線距離にして約17km、鶴来町白山町地内に所在する。

本遺跡は手取川扇状地扇頂部東岸の河岸段丘上に形成され、標高約110mを測り、西方約60mで手取川に到達する。（第１・２図）

手取川は霊峰白山に源を発し、鶴来町を経て西流し、日本海に注ぐ延長70km、県下最大の河川である。遺跡の所在する段丘裾には、手取川の洪水と濫乱の繰り返しによって運ばれた土砂や礫石が堆積しているが、出水による冠水の危険をおかし、川べりに位置しているのは、飲料水・漁撈の便によるものであろう。

次に、白山遺跡・白山町中世墳墓遺跡の周辺地域の遺跡を概観してみると、まず縄文時代の遺跡は、昭和34年から昭和36年にかけて調査された白山上野遺跡[1]、本遺跡の北延長上約１kmの独立丘陵上に舟岡山遺跡[2]が存する。舟岡山遺跡からは、計三個の炉址および三基の敷石住居址を検出している。その他、独鈷石が出土した石切小原遺跡や井口遺跡・荒屋遺跡があげられる。

平安時代の遺跡としては、荒屋集落遺跡・知気寺遺跡・道法寺遺跡・柴木南遺跡・柴木Ａ遺跡・柴木Ｂ遺跡・柴木Ｃ遺跡・安養寺遺跡[3][4]があげられる。知気寺遺跡からは陶硯が出土している。また、安養寺遺跡は中世にかかる遺物も出土しているが、県内の奈良・平安時代の掘立柱建造物群や土器編年を考える上で非常に重要な遺跡といえる。

中世以降の遺跡としては、白山町墳墓遺跡と同じ性格を持つ日吉町遺跡・薬師寺跡・清沢願得寺跡・日詰町遺跡[5]・白山町遺跡がある。

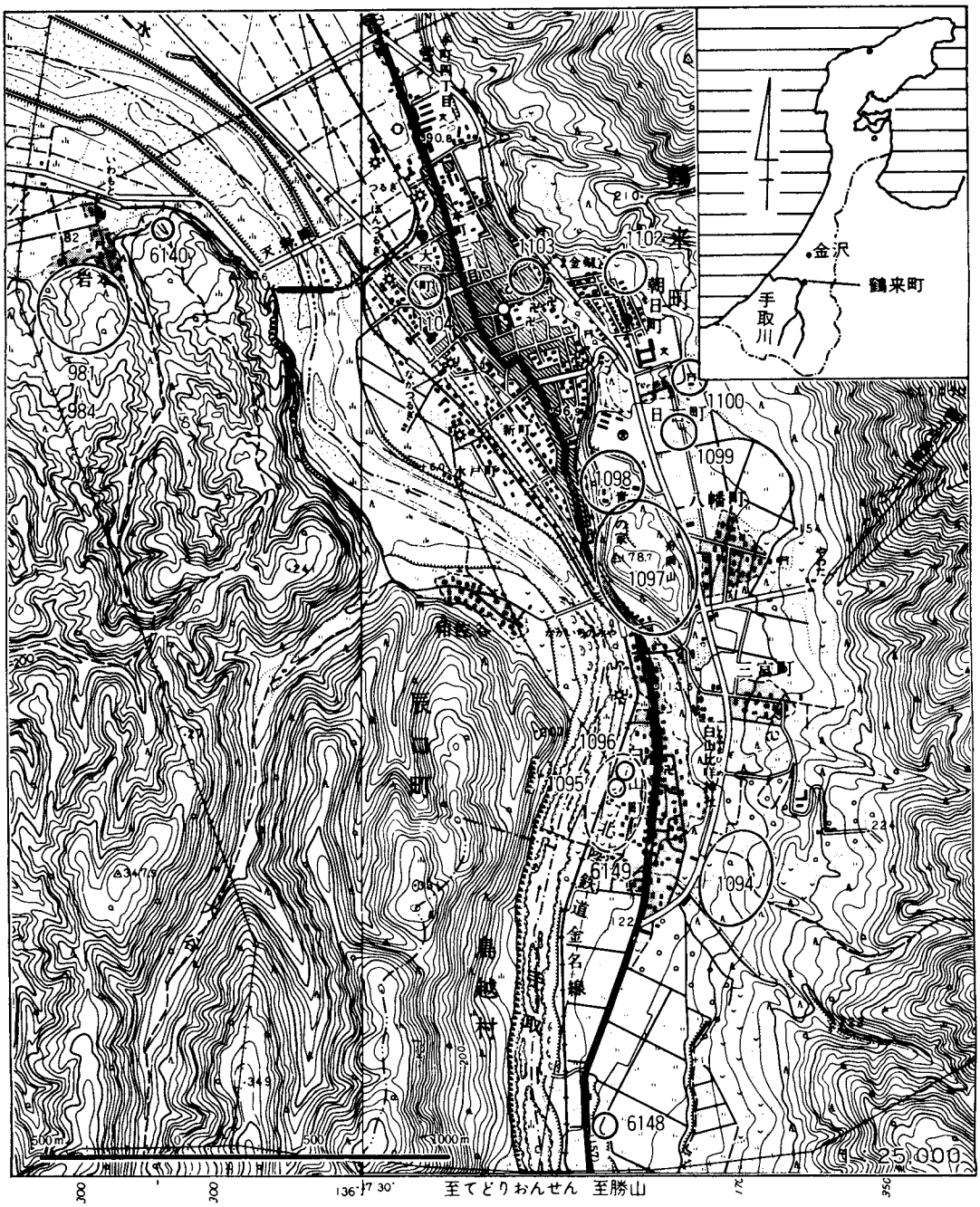
日吉町墳墓遺跡からは墳墓の蓋石、五輪塔、板碑、陶質土器が出土している。

また、「石川県遺跡地図」に記載されていないが、昭和53年に石川県林業試験場内で、植林の移し換え作業中発見された、仮称「林業試験場内遺跡」では、五輪塔（空輪・地輪）・越前焼片？１点・打製石斧１点が出土している。

鶴来町内の各遺跡について簡略に記述したが、奈良・平安時代に至って手取扇状地の開発が本格化したことは、ほぼ確実といえる。

II　調査にいたる経緯

昭和46年に石川県企画開発部から県教育委員会文化財保護課に、手取川ダム建設の計画がしめされ、県下における70年代最大の開発プロジェクトがスタートしていった。白山麓の谷を大きく



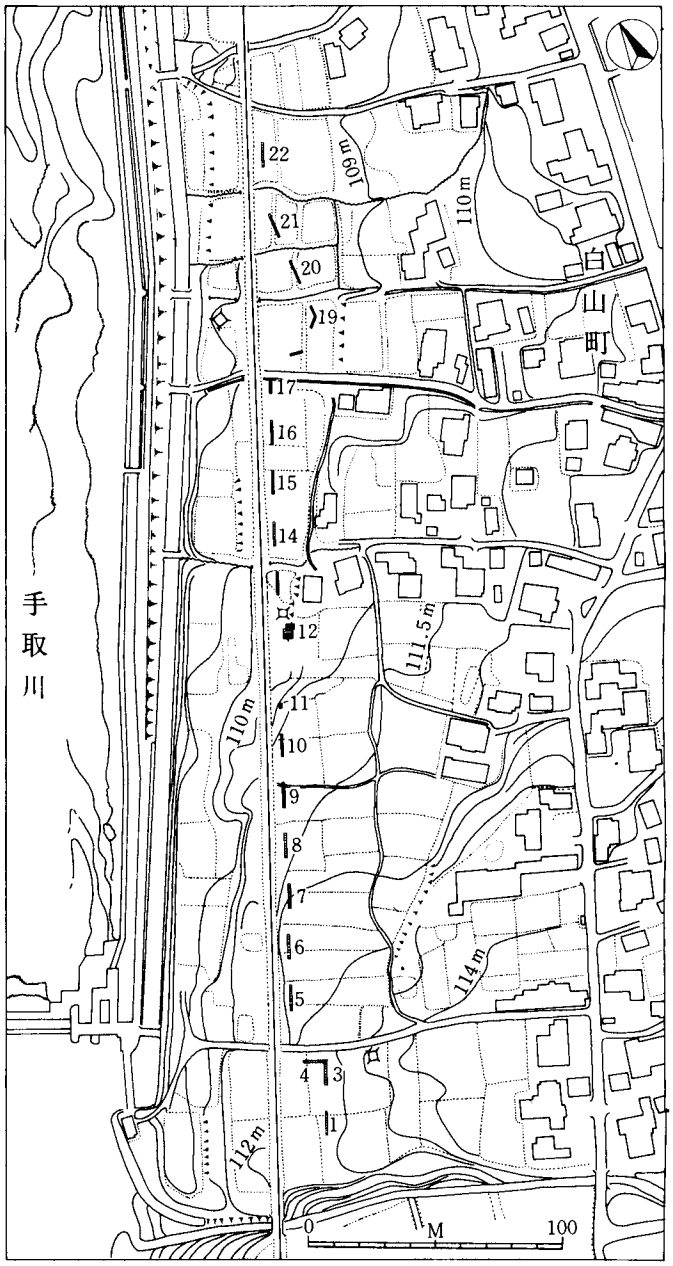
第１図　周辺の遺跡（１／25,000）（「鶴来」「栗生」分載）

県No.	町No.	枝No.	名称	所在地（通称）	種別	現況	時代	出土品	備考
1094	1		白山上野遺跡	鶴来町白山町（キツネヅカ）	包含地	丘陵端・畑地	縄文	土器、土偶 石斧、その他	
1095	2		白山遺跡	〃 白山町（カッサカ）	集落跡	〃 ・水田	〃 後晩期	石器、土器	
1096	3		白山町墳墓遺跡	〃 〃（〃）	墳墓	平地・畑地	中世	五輪塔、珠洲焼	中世墓地
1097	4		舟岡城跡	〃 八幡町（フナオカヤマ）	城跡	台地・山林	不詳		
1098	5		舟岡山遺跡	〃 〃	包含地	宅地・縄文	縄文 中期	石器、土器	竪穴住居跡家屋復元
1099	6		石切小原遺跡	〃 日吉町（イシキリオハラ）	〃	平地・山林	〃	石器	単独出土
1100	7		薬師寺跡	〃 〃（〃）	寺院跡	平地・畑地	安土 桃山		
1101	8		日吉町墳墓遺跡	〃 〃（〃）	墳墓	台地上・荒地	鎌倉	蓋石、五輪塔 板碑、陶質土器	
1102	9		清沢願得寺跡	〃 朝日町（オロンニヤ）	寺院跡	〃 ・社地（境内）	不詳		鐘つき堂跡あり 現在児童公園 一隅に保存
1103	10		日詰町遺跡	〃 日詰町	包含地	平地・宅地	鎌倉	土師質土器 陶質土器	
1104	11		大国社跡	〃 大国町	宮城	平地・宅地	不詳		
6148	23		白山町墳墓遺跡(II)	〃 白山町	墳墓	〃 ・水田	中世	五輪塔	
6149	24		白山町遺跡	〃 〃	集落跡	〃 ・ 河岸段丘	〃	磁器、陶器	
6140	147		岩本B遺跡	辰口町岩本	包含地	丘陵裾	平安		
981	39		岩本岩根宮遺跡	〃 〃	〃	平地・社地	縄文中 後期	縄文式土器多数、 石錘 4、石斧	
982	40		岩本中世墓遺跡	〃 〃（テラタニ）	墳墓	台地上・山林	中世	五輪塔、宝篋 印塔、土器片	岩本宮背後
983	41		岩本家清館跡	〃 〃（〃）	館跡		不詳		石垣あり
984	42	1	岩本1号経塚	〃 〃	経塚	丘陵斜面・〃	中世		
		2	〃 2号 〃	〃 〃	〃	〃	〃		
		3	〃 3号 〃	〃 〃	〃	〃	〃		
		4	〃 4号 〃	〃 〃	〃	〃	〃		
		5	〃 5号 〃	〃 〃	〃	〃	〃		
		6	〃 6号 〃	〃 〃	〃	〃	〃		

第1表　周辺の遺跡地名表 (6)

変える開発は多岐にわたり、水没地区や発電所用地などに含まれた遺跡は数多い。昭和49年度には尾口村東二口・御所の館縄文遺跡（縄文後～晩期）、代官所想定地[7]、昭和50年度には白峰村桑島・東島遺跡（縄文中期[8]）、同村桑島象ヶ崎館跡（近世初頭[9]）、象ヶ崎遺跡（縄文中期[10]）の発掘調査が実施され、象ヶ崎館跡は昭和53年度まで継続調査が行われた。

手取川ダムを貯水施設として、加賀・能登4市10町に水道用水を供給する事業は、ダム建設とともに進められ、本遺跡の南方約1.5kmには急速ろ過池32池を含む75池を持つ巨大な浄水場が建設されている。市・町の受水池や調整池が完成すれば、一日最大給水量39万トンの規模を持つ事になる。本遺跡はその導水管（管径180cm）の埋設工事に係る緊急発掘調査として実施されたものである。



第2図　遺跡の地形図（1／3,000）

白山町墳墓遺跡は戦前から知られていて、白山町浄養寺境内にある墓地に紀年銘を刻んだ五輪塔地輪は、本遺跡から移築されたものと伝えられている。浄養寺墓地には3例の銘文をもつ地輪があり、文明二年（西暦1470年）・□運権少僧都、文明五年・良快[11]、文明三年・□□釈完尼と判読されている。さらに、昭和55年夏に導水管と平行する位置で建設される鶴来バイパスに係る緊急調査によって、永正十八年（西暦1521年）・勝運権少僧都を刻む地輪が出土し本遺跡を理解するうえで、大きな手掛りが得られている。

白山遺跡の発見は昭和34年以前にさかのぼり、異形石器採集地として吉岡康暢氏が報告されている[12]。縄文時代後・晩期の所産と推定されていたが、昭和47年度に実施された石川県埋蔵文化財包蔵地分布調査を受けた「石川県遺跡地図」には、白山町墳墓遺跡と地点をならべて小さく記さ

れているにとどまった。これは遺跡が荒地・竹林・宅地となっているために、その分布範囲を地表観察だけで把握するのは不可能に近い状況があったためである。

その後、両遺跡付近は手取川をのぞむ河岸段丘上の宅地、畑地として、北陸鉄道金名線の沿線ではあったが、のどかな風景のなかにあった。

昭和54年5月22日付で企業局水道建設課長から県立埋蔵文化財センターに、水道用水供給の径180cmの水道管を埋設するため、両遺跡の分布調査依頼が提出された。分布調査委託を受けて、センター職員は数度の現地踏査を行い、広い範囲にわたって珠洲焼片、越前焼片、土師質土器小片を表採したので、同年7月23日から8月10日にかけてトレンチ調査を実施した。所要延日数は9日間である。試掘調査は幅1m、長さ10mのトレンチを10m間隔に22ヶ所に設定した。調査範囲は南北方向で約450mにおよんだ。試掘調査は地山面と想定される面まで掘り下げ、包含層の有無および遺物の検出を主眼としたが、後述する如く手取川の河原石があらわれたり、まったくの砂利層を見るにとどまる地点が見られ、また、出土する遺物にも小片で角がとれたものが多く、流水や大きな移動を推定させた。トレンチ調査の結果、北方部分の2地点、約150mの範囲においては本調査を必要とする回答を行った。穿削幅を約5mとして約750m²の面積である。

昭和54年9月1日付で石川県企業局長から本調査委託が提出され、同年9月5日から同年11月9日まで発掘調査を実施した。そのうち、9月17日から10月3日までの間は、金沢市袋畠町および稚日野町北塚B遺跡[13]の分布調査が急がれたため、やむを得ず中断した期間がある。

発掘調査を進めるにあたって、鶴来町白山町民、鶴来町文化財保護課をはじめとして企業局水道建設課、㈱小山組、㈱丸石建設の方々の協力があった事を記し、謝意を表しておきたい。

遺物整理および報告書刊行事業は、昭和55年度事業分として企業局で計上し、埋蔵文化財センターで事業を実施した。なお、石川県埋蔵文化財協会が遺物整理・実測を行った。事業に協力していただいた方々に深謝しておきたい。

III　層序と遺構の配置

1．試　掘　調　査

北陸鉄道金名線に沿う南北約450mの範囲において、10m間隔で22本の幅1m、長さ10mのトレンチを設定して実施した。河岸段丘上あるいは段丘下であるなど微地形的な変化はあるが、ほぼ水平位置での試掘調査であった。しかし、層序および地山層の地点ごとの違いは大きく、砂層、礫層がこまかく変化し、また、洪水によると思われる大きな攪乱層があるなど地山層の確定が最もむずかしい判断を要した。以下、各トレンチ（T）ごとの層位を略記してゆく。各トレンチ番号は、第2図に表示した。番号は上層位から付して、層厚を記した。

1T南壁　I表土および暗褐色砂層（55cm）　II暗茶褐色砂質土層（17cm）　III砂礫層(地山)

北壁　I表土および濁黄褐色土層（60～65cm）　II黄褐色砂層（地山）

出土遺物　なし。

3T南壁　I濁褐色砂質土層（50～55cm）　II砂礫層（地山）

出土遺物　青磁、土師質土器小片

4T東壁　I褐色砂質土層（40～45cm）　II濁褐色砂質土層（19～29cm）　III暗褐色砂質土層（30～40cm）　IV淡黒褐色土層（20cm）　V砂礫層（地山）

西壁　I表土（20cm）　II黄褐色砂質土層（35cm）　III黄褐色砂質土層（砂粒細かくなる）（28cm）　IV淡褐色土（25cm）　V砂礫層（地山）

出土遺物　I層から青磁片、土師質土器片が10片程出土する（流入か）。　IVからの出土遺物は認められなかった。

5T南壁　I表土および暗褐色砂質土層（30cm）、II茶褐色砂質土層（礫を混じえる。20cm）III砂礫層（地山）、出土遺物、なし。5Tより北へ行くに従い、II層に混る礫は大きくなり量もふえる。

6T南壁　I暗褐色砂質土層（30cm）　II砂礫層（砂が多い20cm）　III砂礫層（地山）

北壁　I　〃　　II　〃　　III砂層（地山）

出土遺物　なし。

7T南壁　I表土および暗褐色砂質土層（40cm）　II砂礫層（地山）

出土遺物　表土層（約10cm）から土師質土器小片。

8T南壁　I表土および暗褐色砂質土層（25cm）　II砂礫層（地山）

出土遺物　なし。

9T北壁　I表土層（20～30cm）　II礫を含む暗褐色砂層（30～45cm）　III黄褐色砂礫層（地山）

出土遺物　土師質土器片、天目片。

10T南壁　I砂礫を含む表土層（20cm）　II褐色砂礫層（20cm）　III黄褐色砂礫層（地山）

11T　〃　I　〃　II　〃　III　〃

出土遺物　なし。

12T東壁　I表土層（20cm）　II暗褐色砂礫層（18cm）　III茶褐色砂礫層（24cm）　IV黄褐色砂礫層（地山）

出土遺物　越前焼片、土師質土器片、五輪塔火輪。

13T南壁　I茶褐色土層（30cm）　II黄褐色土層（30cm）　III暗褐色遺物包含層

出土遺物　土師質土器多数がIII層より出土する。溝状遺構。

14T南壁　I表土層（20cm）　II暗茶褐色砂層（40cm）　III茶褐色砂層（地山）

出土遺物　土師質土器小片。

15T南壁　I表土層（30cm）　II茶褐色砂礫層（40cm）　III黄褐色砂礫層（地山）

出土遺物　なし。

16T南壁　I表土および褐色砂層（40cm）　II褐色砂礫層（30cm）　III黄褐色砂層（地山）

出土遺物　なし。

17T　16Tと同じ層序。出土遺物なし。

18T東壁　I水田耕作土（15cm）　II暗褐色砂礫層（35cm）　III褐色砂礫層（地山）

出土遺物　越前焼10片程がIIの上位で検出された。

19T南壁　I水田耕作土（17cm）　II濁褐色土層（50cm）　III茶褐色砂層（鉄分が多い20cm）　IV淡褐色砂層（地山）

出土遺物　越前焼片、陶磁器片。

20T東壁　I水田耕作土（15cm）　II暗褐色砂礫層　III濁黄褐色砂礫層（地山）

出土遺物　越前焼片、青磁片

21T南壁　I水田耕作土（15cm）　II茶褐色土（鉄分多い床土4cm）　III暗褐色砂層（30cm）　IV黄褐色砂層（地山）

出土遺物　陶磁器片、鉄器片

22T南壁　I水田耕作土（15cm）　II暗褐色砂礫層（50cm）　III褐色砂礫層（地山？）

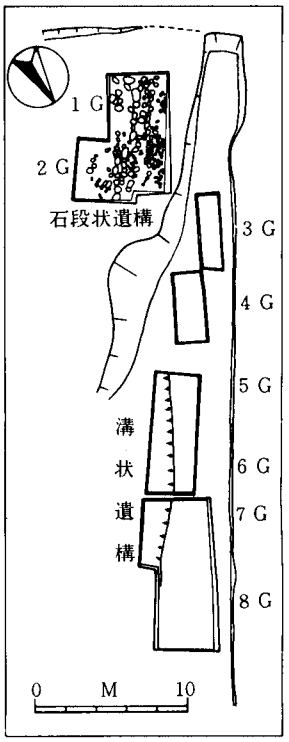
出土遺物　珠洲焼片、越前焼片、土師質土器片

各トレンチの層序は、以上のような状況を示していたが、これを概略化して遺物の散布状況をまとめてみたい。南端部分の3～5Tの表土層および砂質土層は40～55cmの厚さを測り、少量ながら遺物の包含も認められたのであるが小片少量であり流入したものと判断したい。微地形を見ると東方部に50～80cmの段差をもつ高まりが見られるのが注意される。6～11Tまでは地山面が礫層となり表土層の層厚も薄い事が知られ、遺物の出土も少なく遺構の存在する可能は　低いものと観察された。12・13Tでは遺物量は比較的豊富な地区で、13Tでは溝状遺構が検出された。14～17Tでは砂層と礫層が地山面をなしているが、表土層中およびその下層でも注意すべき遺物の検出はなく遺構はないものと判断された。18Tから22Tにかけては陶磁器片の出土量が増えてゆき、珠洲・越前焼などの陶質土器が注意されたものの明快な遺物包含層を認めるのは困難であっ

た。しかし、何らか遺構があるものと推定された。つまり、南北約 450ｍの長さのなかで、12・13Ｔの約40ｍ、18Ｔから22Ｔの 110ｍ の範囲については何らかの遺構がのこされていると判断されたわけである。

２、層序と遺構の配置

分布調査の結果を受けて、各トレンチ幅を工事用掘削幅に拡張する方法でもって各発掘区画を設定していった。南方部12・13Ｔで南から35ｍを区切るかたちで１～８Ｇを置いた。１・２Ｇは導水管工事区から離れているが、５・６Ｇに在る北陸電力㈱の高圧鉄塔を移転新築する地点となるために設定した地区である。３～８Ｇは段丘下にあたり、１Ｇとの比高は1.5～２ｍ程をはかる。１・２Ｇは北方へゆるく傾斜する段丘の端部にあたり、第１層の小砂利を含む砂層が南と西へむけて層厚を増し、第２層の小砂利層に対応した在り方を示している。そして、東方部では大きな河原石が目立って多くなる。地山面は礫層であるが、人頭大の河原石が列状に配置されているのが知られ、石段かあるいは土止め用の石積みかと想定された。出土した遺物は、縄文式土器から近世陶磁器まで幅は大きいが、中世の遺物が目を引く。３～８Ｇは段丘下にあたり、第１層は茶褐色を呈する表土層で、小石の混入の少ない耕土層である。第２層は濁黄褐色砂層で、小片となった土師質土器や炭化物を含む包含層で、７Ｇでは特にその出土量が多かった。そして、３・４Ｇでは粘性を帯びているが、土師質土器の出土量は少なくなる。第３層は７Ｇで特に顕著に認められ、淡黒褐色砂層で遺物の混入も多い。これは、５～７Ｇまでの段丘線に沿う溝状遺構の覆土であった。現場では西側の落ち込みをとらえたが、東方は未発掘のため幅を知り得ないものの、地形的な制約を考慮すれば、幅約２ｍ程度で深さ30～40cm程の数値が得られる。なお、溝の延長は確認したもので約14ｍをはかるが、３・４Ｇでは検出できず、南方へは伸びていない可能性が高い。地山面としたのは、３・４Ｇでは砂層で表土から深さは約110 cm を測り、７Ｇでは礫層が顔を出していて、表土からの深さは約60～90cmであった。出土遺物は、近世陶磁器は少なく中世の遺物が多い。特に土師質土器は発掘区全体のなかでの半数を占めているのは、溝状遺構をとりまく地区を考えるうえで注意しなければならない。



第３図　遺構配置図（Ｉ）
（１／500）

北方部分は18トレンチから22トレンチを拡張して全掘した地区である。グリッド番号は工事の進行にあわせたために、22トレンチの北から９Ｇとし、18トレンチは27Ｇとなる。北の方から順次記述してゆく。

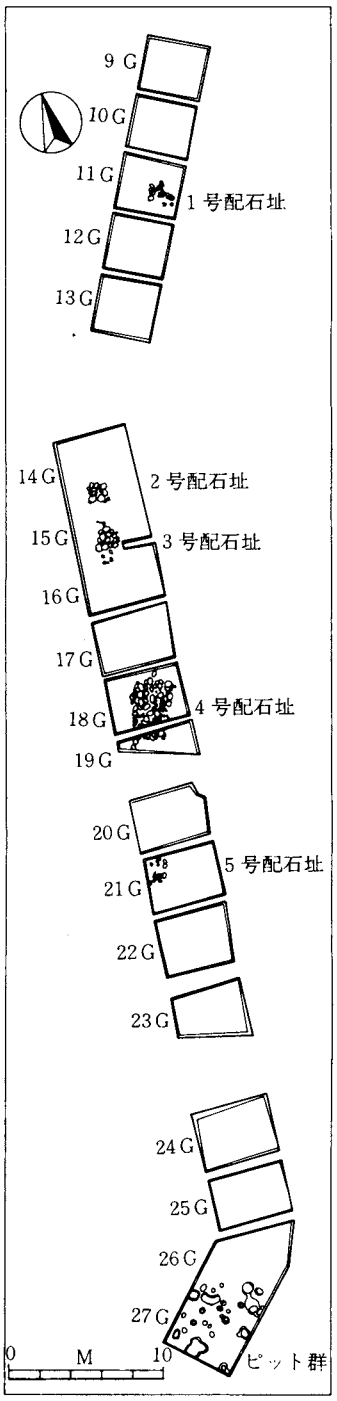
９～13Ｇの層序は単純で、第１層は水田耕作土で約15cm、第２層は暗茶褐色砂質土で35～60cmで、所々に人頭大の礫をかむ遺物包含層がある。第３層は濁黄褐色砂質土で10～20cmの層厚をはかる。地山は砂層でときたま礫層がのぞく。11Ｇでは礫を立てて並べた配石址一基（第１号配石

址）が検出され、出土遺物は越前焼、土師質土器を中心として中世の所産が多い。

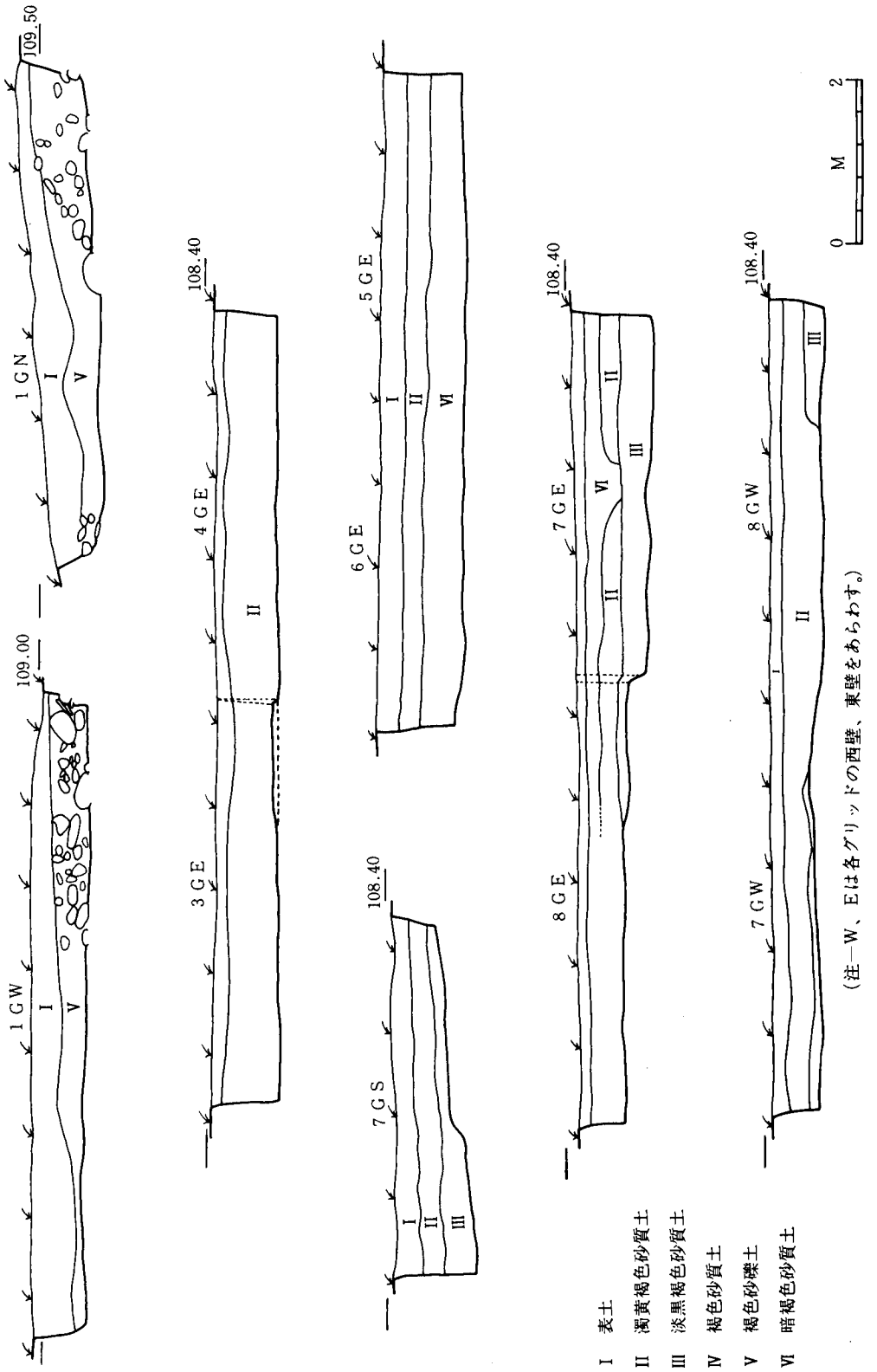
14～19Gでは、河原石が3ヶ所にわたって集石（第2～4号配石址）したものを検出したが、伴出する遺物はなく掘り込み等も認めがたく遺構とするのには、ためらいがのこる。第1層は耕作土層で15～20cm、第2層は茶褐色砂層で10～30cmをはかる。鉄分が多く固くしまっている。第3層は暗茶褐色砂層で粗い砂で形成され柔かい砂層である。出土遺物の多くは第2層と第3層の境界付近からのものが多く、30～40cmの層厚の下位からのものは皆無であった。地山は濁黄褐色砂質土で粗い砂で形成され、地点によっては砂礫層となる。出土した遺物は縄文式土器を含むが、中世に所産するものが多い。

20～23Gの層位は大きく乱れ、50cmを越える河原石が多く見うけられた。また、水田の土止め用の石がグリッドを斜めに横切るかたちとなり、層序の判別をむずかしくしている。基本となる層序は14～19Gのものと変りはないが、攪乱が所々に入り込み砂礫層を形成している。出土遺物の大部分は攪乱層から得られたもので、手取川へ流れ込む小河川があったものと想定される。20Gでは特にそれがよく観察され、第3層の暗茶褐色砂層は黄褐色砂層をブロック状にかみ込んでいて、層底面は北西方向に傾斜し、幅は約2.5m以上と推定された。21Gには河原石の集石のなかに、立て並べた配石址一基（第5号配石址）を検出しているが、時期を判断させる遺物の出土はなかった。遺物は攪乱層から豊富に出土し、各時期をほとんど全てを含んでいるが、近世陶磁器が目立ち攪乱層の時期を推定することができる。

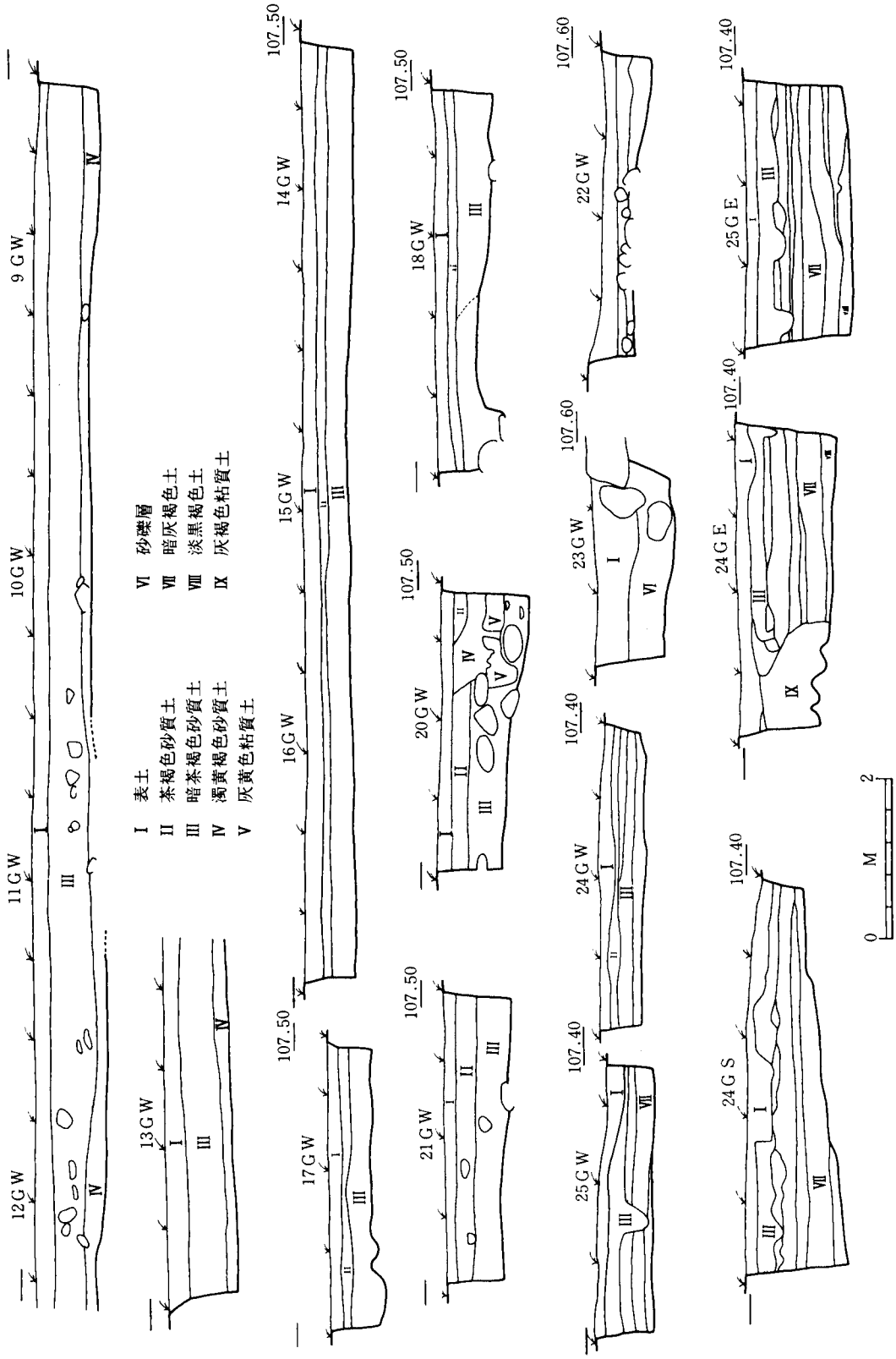
24～27Gの第1層は水田耕作土の約15～20cm程の深さをはかり、第2層が遺物を包含する暗茶褐色土である。15～27cmの層厚があり、中世に所産する遺物が出土している。24・25Gでは地山面を確定できず深さ130cmまで掘り下げ礫層に至ったが、中世期の遺構面は第2層が相当するもので、発掘ミスであった。灯明皿および炭化物の出土は第5層（表土から約75cm下）にまでおよんでいて、段丘面上における土砂堆積の複雑さを感じさせる。そして、地山とした礫層は西が高く東方に向けて大きく傾斜を見せていた。26・27Gではさきの結果をふまえて第2層を除去した面で遺構の検出を行った。不規則なかたちで20を越えるピットを検出したが、いずれも掘り込みは浅いものであった。なお、ピットの半数近くの覆土から土師質土器の破片を得ている。



第4図　遺構配置図（II）
（1／500）



第5図　1～8G土層断面図（1／80）

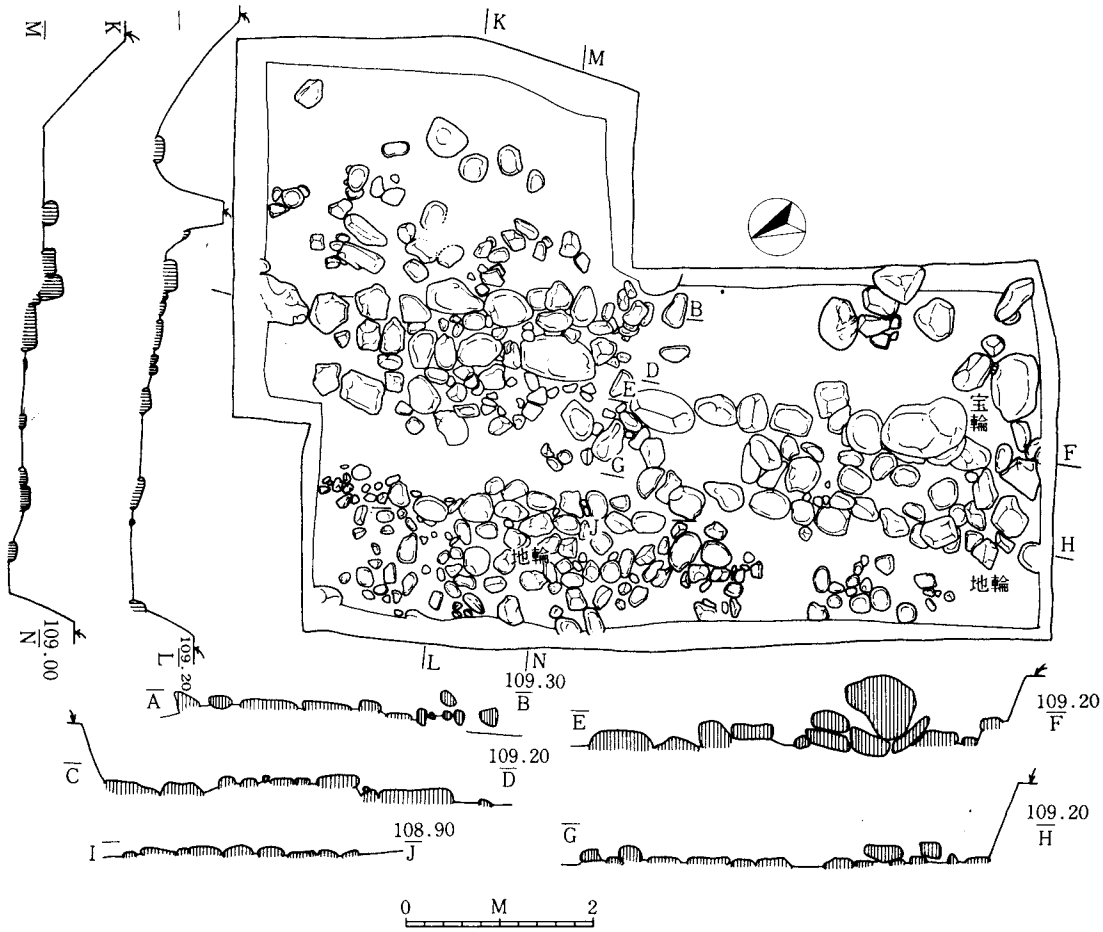


第6図　9～24G土層断面図（1／80）

Ⅳ 遺　　構

1．石段状遺構（第７図、図版３）

調査区の南方端、１・２Ｇで検出されたもので、不揃いではあるが列状に石が並んだ状態で発掘された。石の列はほぼ北東方向をさし、河岸段丘端部の傾斜変換線に沿うかたちをとり、約５列の列石を見ている。東端にあるＡＢ列(断面図で示したもの。以下同じ)は長さ約3.5ｍを測り、さらに東方にあったと想定される石列と平行する。ＡＢ列の西方には約30cmの段差をもってＣＤ列が、やや東方に寄って並べられ長さ4.1ｍを測る。長径80cmを越えるものも長軸をそろえるようにして組み込まれている。ＣＤ列の延長とも考えられるが、ＥＦ列がその南方に長さ4.2ｍにわたって検出された。径70cmを越える大石が組み込まれており、ＡＢ列・ＣＤ列とは異なる性格を想定させる。これは土止め用の石列と考えたい。これと平行して西方向約60～70cmの位置に、長



第７図　１・２Ｇ石段状遺構実測図（１／80）

さ4.4mのＧＨ列があり、南端近くには五輪塔地輪が置かれていた。ＣＤ列の西方約1.5mの位置には、長さ3.6mにわたるＩＪ列がある。ＣＤ列との比高は約10cmであった。さらに西方へは傾斜をもって落ち込んでゆくようだ。五輪塔地輪が１個発掘されている。

出土した遺物は、縄文時代の遺物が２点あり、他は中近世の遺物である。越前焼の破片が他のグリッドに比較して多い。特に注意しなければならないのは、中世石造遺物が３点出土していることであり、石列に組み込まれていることから供養塔としての意識がなくなった段階での所産を考えねばならないであろう。

２．溝状遺構（第３図、図版４）

５～８Ｇにわたって検出された遺構で、発掘区が限定されたことから片側の肩をおさえるにとどまった。層序については先の節で述べたので略するが、段丘直下の位置にあたり、東方側の落ち込みは、段丘傾斜面にあたるのではないかと想像される。南北方向での長さは14mを測り、深さは30～40cm程であった。南方にむかうにしたがい落ち込みの肩部ははっきりとはしなくなり、南方部分へはさほど延びていないものと考えられた。

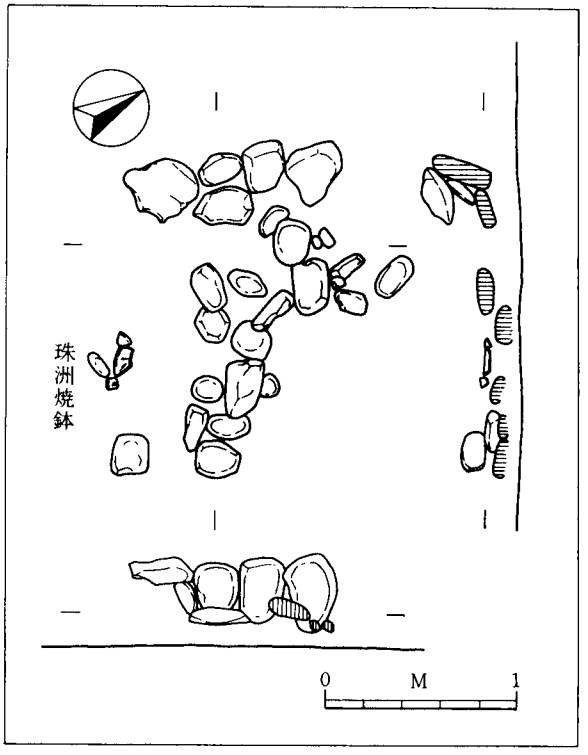
覆土は淡黒褐色砂層が30～40cm堆積していて、遺物を包含していた。

出土した遺物は大半が土師質土器の破片で総数1,000点を数え、それに青磁・瓦器の少数が伴出している。

３．１号配石址（第８図、図版７）

発掘区北端の11Ｇで検出された配石址である。東西約1.7m、南北約1.6mの長方形の範囲のなかに、長径30～40cm大の河原石を10数個を並べて区画をつくり出すものである。北西端には、３個の石が長軸を立てて配置しているのが特に注意を引く。長軸に沿って小振りの丸い石が並べられているが、やや動いているようだ。

主軸の方位は北62度西に置いている。手取川の流路とはほぼ直行するかたちとなる。南西端には第15図32で示した珠洲焼の擂鉢口縁が検出されている。



第８図　１号配石址実測図（１／40）

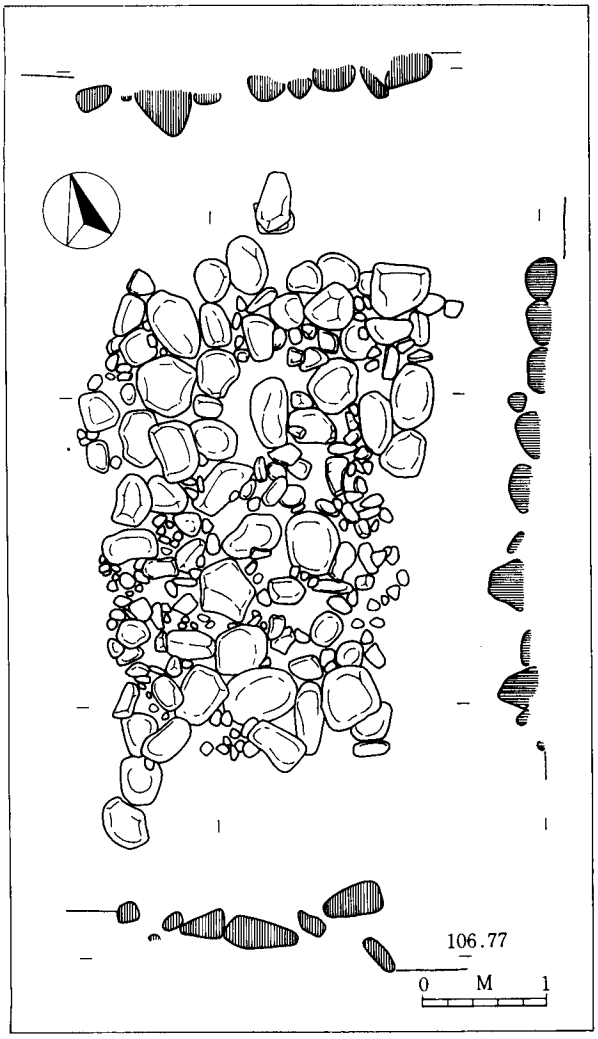
４．２・３号配石址（第９図、図版７）

発掘区の北方部分、14・15Ｇで検出された。１号配石址の南西方向約20mの位置に

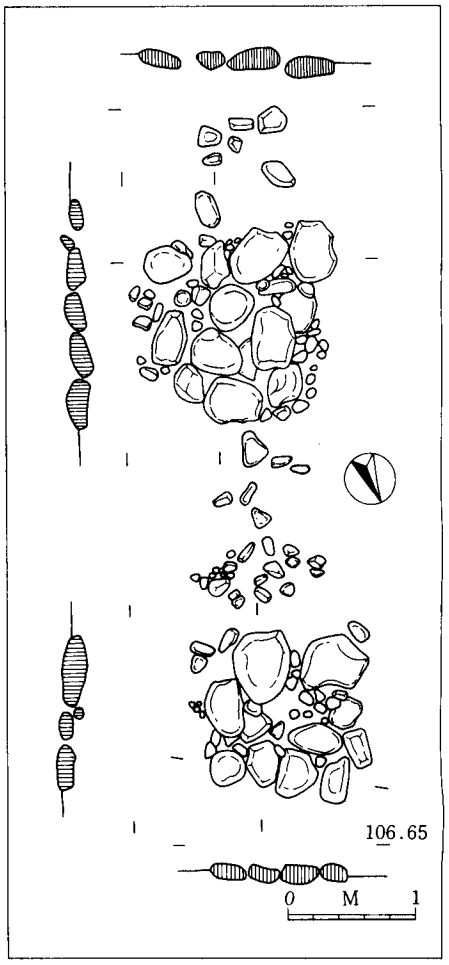
あたる。北方の２号配石址と南方の３号配石址の間隔は、約110cmをはかる。

２号配石址は長径30～60cmの自然石を、一辺約 1.3 mの方形区画に10個を配置するものであった。石の上面は、ほぼ水平位置にならされている。検出された層位は、第３層の暗茶褐色砂質土層で炭化物および土師質土器小片を包含するものであった。

３号配石址はさきと同様の大きさを示す自然石を、一辺約1.6mの方形区画のなかに、12個を配置し間を小礫でうめるような形になっていた。石の上面はやはり水平位置を保つようになっている。配石を検出した面は地山とした砂層であるが、10数cmおいて礫層となる。



第10図　４号配石址実測図（１／60）



第９図　２・３号配石址実測図（１／60）

２基の配石址の上面、および周辺から、見るべき遺物の出土はなかった。ただ、配石址の下位約10cm程までの間には、炭化物の粒子を得ていることから人為的な配石であると考えられる。

５．４号配石址（第10図、図版９）

発掘区の中央部分、18・19Ｇで検出された配石址である。３号配石址の南方約10mの位置にあたる。南北方向約４ｍ、東西方向約2.8ｍの長方形プランのなかに、長径30～50cmの自然石、40個近くを配置するものであった。南北方向で断面

図を作製した位置が、比較的安定した列石を保っているものと判断されたが、石の上端での起伏が大きいのが注意される。

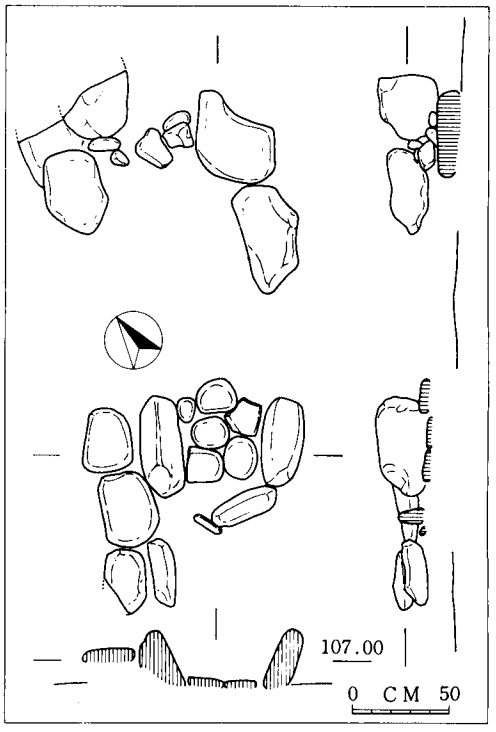
主軸方位は北15度西に置いている。

周辺および下層から出土遺物には、特に見るべきものはなく、自然の流下の過程で形成されたものとの疑いはぬぐい去りがたい。しかし、一方、昭和55年度の第２次調査で発見された中世墓址（図版20参照）は３ｍ×５ｍの方形区画を自然石でかこむ在り方を示していて、４号配石址に類似する点は捨てがたい。本遺跡での今後の発掘調査の進展を待って結論を出してゆきたい。

６．５号配石址（第11図、図版９）

21Ｇの北西隅で検出された配石址で、５号配石址の南方約９ｍの位置にあたる。周囲は長径50cmを越える河原石が密集し、さらに層位も複雑な様相を呈していたが、南端にあたる２個の石が斜め位置に向かい合って立っていた事から配石址と判断されたものである。

長軸方位は北36度東に置く。北半部分の状況は決めがたいが、南北約2.7ｍ、東西約1.2ｍの方形プランを持つものと思われる。向かい合った石の長径は40～60cmで、約40cmをおいて平行位置に置かれ、間には径約20cmの粒のそろった丸石が平面を保って置かれている。また南端部分にはやや小振りながら縦位置になった礫が置かれている。西辺には長径30～40cmの自然石が見られ、とりまくように配置されたと推定される在り方を示していた。北半部分は斜位に立てられた石が在るが、現位置を保っているとは考えにくい。



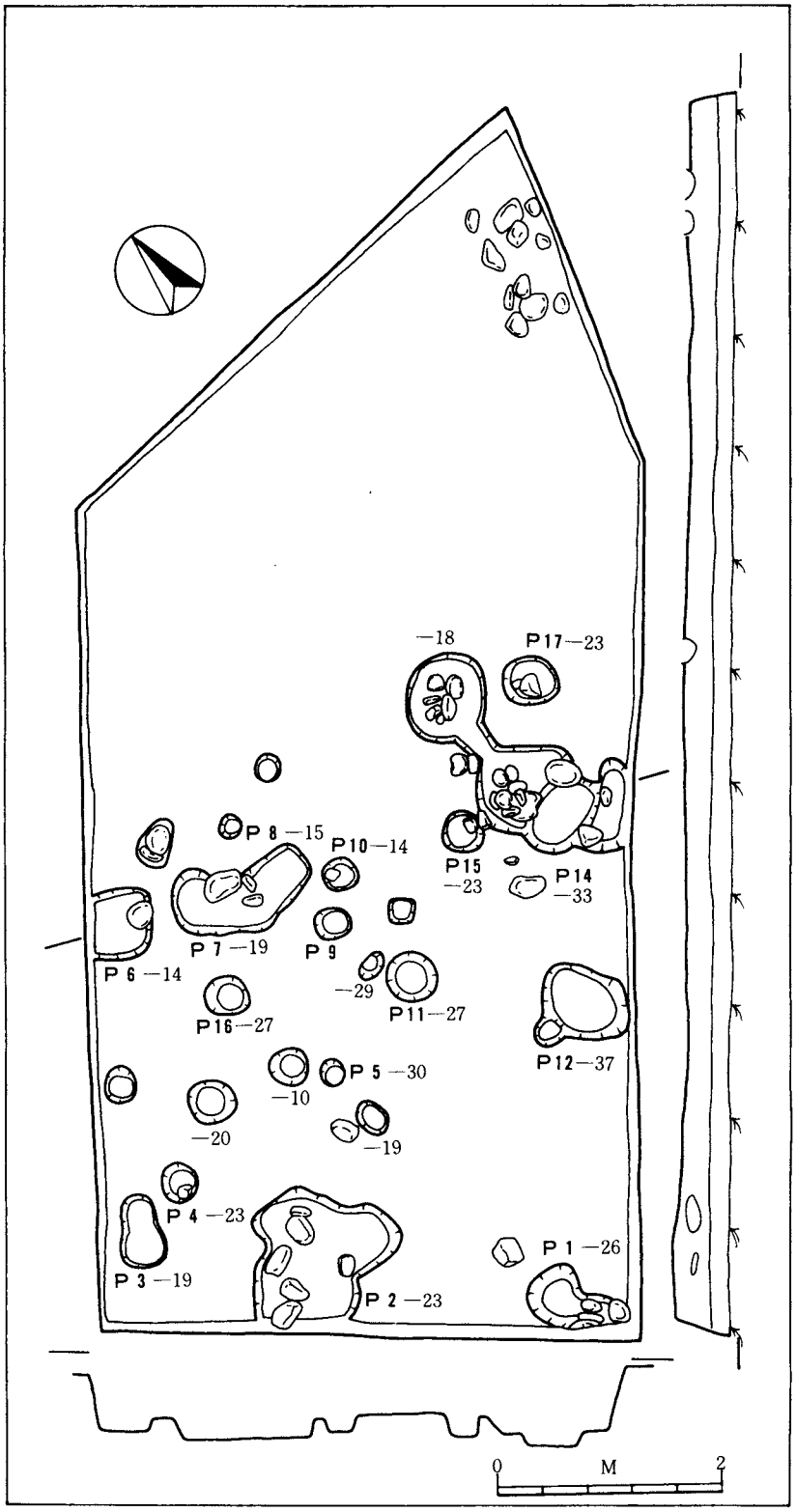
第11図　５号配石址実測図（１／40）

配石址にともなう遺物の出土はなかった。

７．26・27Ｇピット群（第12図、図版８）

北部発掘区の南端、26・27Ｇの第２層暗茶褐色土を除去した面で検出された。第３層は暗灰褐色土層である。27Ｇ全面にひろがるかたちで25個以上の落ち込みを見たが、径20～80cmまでのバラツキがあり、深さも比較的浅いものが多かった。そして、建物を想定できるだけの統一的なものを見い出すのは困難であった。

17個のピットから土師質土器片を得ている。



第12図　26・27Gピット群実測図（1／60)（ピット番号と深さを表示した）

V 遺　　物

試掘調査および本調査によって得られた遺物は、量的には多くなく整理箱で6ケースに満たないものであった。発掘面積は約750 m²程であるが、遺構は少なく包含層の状態も良好とは言えなかった。手取川に直接面した河岸段丘上にあたるために、流入したりして小破片となるものが多く、全形をうかがえる資料は極めて限られている。しかし、各時代を示すものが少数例づつ知られ、白山麓の入口にあたる地理的立地から、古くから人々が生活していた事を示していると言える。

出土したものは、縄文時代晩期の土器・打製石斧・石鏃・石包丁型石器・鏃節型石器、古墳時代初頭の土師器、平安時代の須恵器、中世にはいっては珠洲焼・越前焼・加賀古陶・美濃瀬戸焼・青磁・白磁・青花・黒釉・五輪塔・石鉢・古銭・馬の歯・漆皿？・土師質土器・瓦器などがあり、近世では唐津焼他など多種多様な遺物がある。小片を含めた総点数は3,500点を越えている。以下、各時代ごとに遺物の概略を記してゆきたい。

第2表　出土遺物一覧表（注＝小片をも1点として数えているので、1個体という意ではない。）

遺物＼地点	1G	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	Pit	中世畠	4T	9	18	19	20	21	22	表採	合計
縄文土器		1												6	2		2					9	13		1													34
〃 石器		1				1																2	1						3									8
土師器									1			1																										2
須恵器								1	1	1	1				1		2				1	1	3		3		1											16
珠洲焼 カメ		2		1		1		1	2	1	3	3				1	3				1	9	30		6	2	1		1			2	1	1				72
〃 ツボ			1						1												2	1									2							7
〃 ハチ		3	1	1		1			2		9	1	2	1		1	1	1		1		5	17			2	3	3		1				2		3		61
加賀古陶	1	1				1		1			1							1			2	2	6		3		1					2	1					23
越前焼	5	12		1		1	1	3	5	13	4	4		4	2	1	6	3	2	7	2	20	52		7	1	9	2	1	1		6		7		2		184
瀬戸	3	6	1	1	1		1		1	1	4	2	1		2					2	1	1	16			1				1								46
鉄釉	2								3	1				1								1	2			3				1	1							15
青磁（竜泉）																			1								1											2
〃（福建）	6			1	2		3		4		5	7	3	1	2	1			1	2		10	23		1	6	4			1				4	3	1	2	93
白磁	1																		1								1											3
天目	1							1					1	1									2															6
青花										1					1			1		1		1																5
瓦器						2	1		1		1	1								1			3															10
古銭		1							1							1							1				1											5
石造遺物	2	2									2		1										1															8
土師質土器	12	90	59	149	229	208	629	3	197	63	155	60	89	68	131	3	19	43	13	25	23	43	111		8	35	85	71		4	2			1		5		2652
近世陶器	10	28	3	3	2		6	1	12	6	12	8	4	4	9	2	2	2	2	4	2	67	86		2	1	4	1		1					1	1		286

1．縄文時代の遺物（第13図、図版12）

打製石斧（1～5）は5点が得られた。3・4は15トレンチの東方に位置する中世墓址から表採した資料である。いずれも片面に自然面をのこす通有のタイプである。1～3は短冊型の刃部がわずかにひろがる形状を持つもので、2・3は途中で折損している。1は全体に磨耗が進行しているが、刃先がつぶれているのが観察される。長さ10.6cm、幅6.87cm、厚さ2.52cm、重量232gをはかる。石英安山岩かと推定される。2は刃部の調整をほとんど施さずに側面敲打でとどめている。凝灰岩質で長さ10.67cm、幅8.44cm、厚さ2.5cm、重さ311.5gを測る。3は側面に大きく打撃を加え、さらに小さく調整を施すもので、長さ13.1cm、幅9.5cm、厚さ4.3cm、重さ626.7gを測る。4は刃部が大きく広がる型状を持ち、刃部が鈍角を呈している。側面の敲打調整は入念におこなわれ丸味を出すようになっている。砂岩質で長さ10.9cm、幅9.7cm、厚さ3.1cm、重さ391gを測る。5は完形品で、刃部が斜め位置となるものである。刃部は使用によって斜め刃となったと推定される。玢岩質で、長さ17.4cm、幅9.4cm、厚さ2.65cm、重さは498.5gを測る。

6は五角形を呈する安山岩質の石鏃で、丁寧な調整が施されている。長さ3.15cm、幅1.3cm、厚さ0.38cm、重さ1.0gをはかる。

7は石包丁型の石器と呼ばれるもので、約2分の1以上を欠損している。頭部が弧線を描き、刃部が直線的となる。頭部の厚さが最も厚く、段を置いて刃部になり、刃は両刃となる。凝灰岩質の軟質の石材で、頭部が刃部に横方向に磨き上げた状況が観察できる。長さ8.4cm、厚さ3.2cm、幅6.4cm、重さ234.5gを測る。7・8は中世墓址から表採したものである。

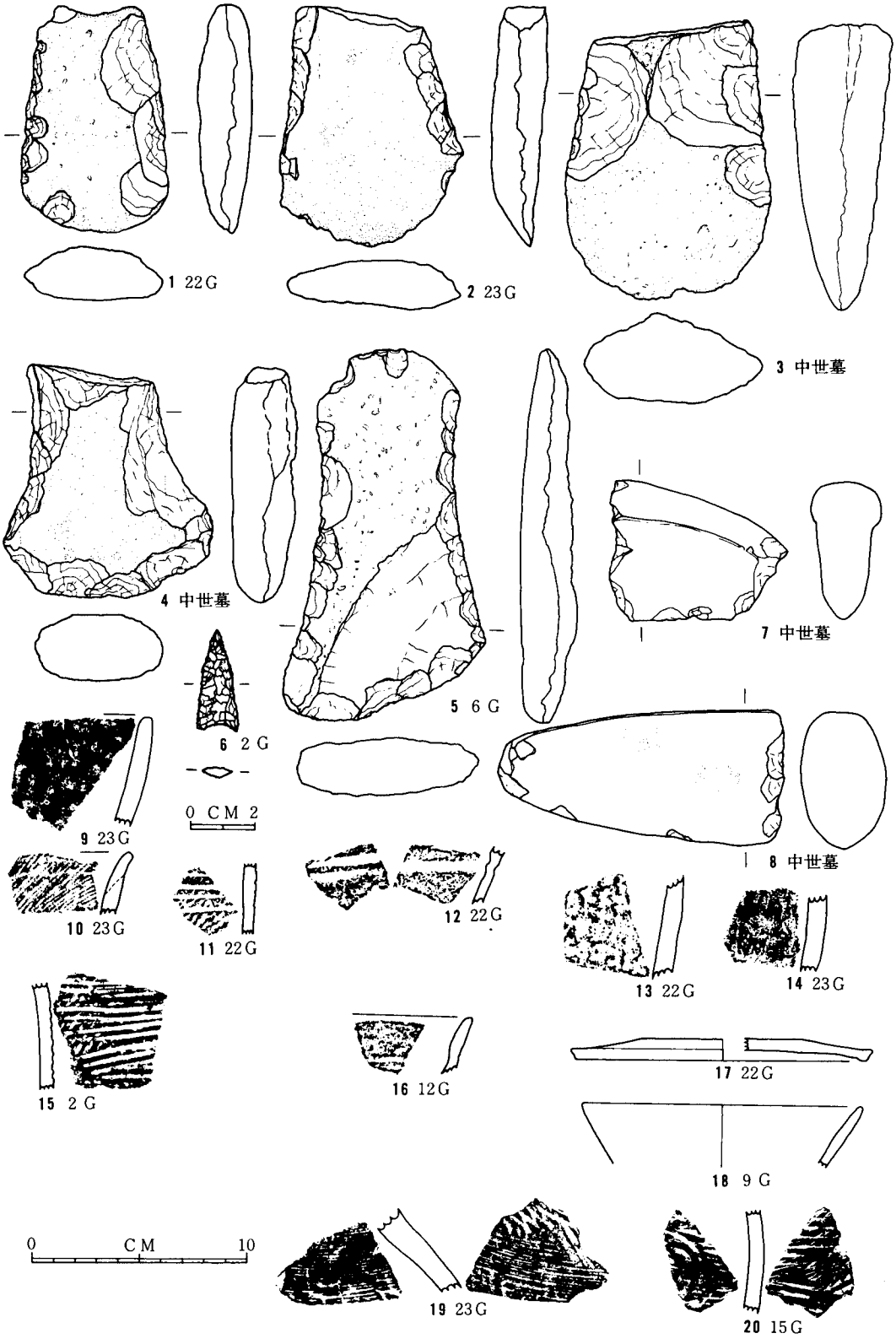
8は鰹節型石器と呼ばれるもので、石包丁型石器と同様に呪術具とされている。石包丁型石器とは逆に、頭部が直線的で刃部が曲線をとる。頭部は平坦にならされ、刃部の中位が膨れ上がり刃部が急激につくり出されている。全体に風化が進行しているが、刃部と頭部平坦面に横方向の磨き調整を認める事ができる。長さ13.2cm、幅6.34cm、厚さ3.86cm、重さ336gを測る。

9～15までは、22・23・2Gより出土したもので、いずれも磨耗がすすんでいて器面調整を明快に示すのは困難である。図示したものを含めて土器片の総破片数は34点であった。

精製、粗製土器として分類すると、10～12が前者で以下後者となる。10は口縁部破片で、RL単節斜縄文を施文する。11は縄文を施した後で、沈線を引くもの。12は内外面に幅4.5mmの幅広の沈線をめぐらすものである。粗製土器は無文・条痕等がある。9は口唇部に面取りを施す無文土器。13は押圧痕を認めるが原体が判然とはしないものである。15は外面に煤が付着し、内面には厚く炭化物が付着している。条痕は8mm幅で2本の条が一単位である。

土器の色調は濁黄褐色から暗茶褐色までの幅があるが、濁茶褐色を呈しているものが多い。胎土・焼成とも良である。

縄文時代の遺物のなかで、時期を明確に示しているものは少なく、第10図10が晩期の中屋式の特徴を持っているにすぎない。石器のなかで、7・8が呪術品であることや、15の条痕土器片であることなどから、後期から晩期にかけて所産したものと考えておきたい。



第13図　縄文式土器・石器・土師器・須恵器実測・拓影図（1／3、1／2）

2．古代の遺物（第13図16～20）

古式土師器は２片が検出された。図示した16は甕型土器の口縁部片であるが、小片のため口径はつかめない。凝凹線が口縁部下端に２条を認めることができる。口縁外面には煤が付着している。色調は濁黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

16は古墳時代初頭の月影式土器と推察される。

17～20は須恵器である。各グリッドから小片となって16片が出土しているが、磨耗しているものが多く、器形を推定されるものは少ない。

17はつまみ部分を欠いている器高の低い蓋である。口径14cm、高さ1.5cmを測る。口唇部に押圧が入れられてへこみ、内面のかえしの部分に弱い線がのこる。18は口径12.8cmの口縁が大きくひらく杯器形が推定される。19は甕の口頸部片で、叩きのあとカキ目調整が施されている。20は同じく甕の胴部片で粗雑な叩き痕を見ることができる。出土した須恵器の色調は、青灰色、灰色であり後者の方が多い。胎土、焼成とも良好であった。これらの須恵器は器種が少なく全体を知る資料がない事から、時期を推定するのは困難であるが、平安時代以降の所産とみて大過ないと思われる。

第３表　陶質土器一覧表（吉岡・平田・西野作製）

器種＼種別	甕			壺			鉢		
	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部
珠洲焼	4	(T一括) 46	1	(Kなし) 3	(Kのみ) 21	1	22	22	11
加賀古陶	0	21	0	0	0	0	1	0	0
越前焼	5	166	4	0	／	0	1	3	0
他（信楽焼含）	0	8	0	0	／	0	1	0	0

第４表　珠洲焼時期別一覧表（吉岡・平田・西野作製）

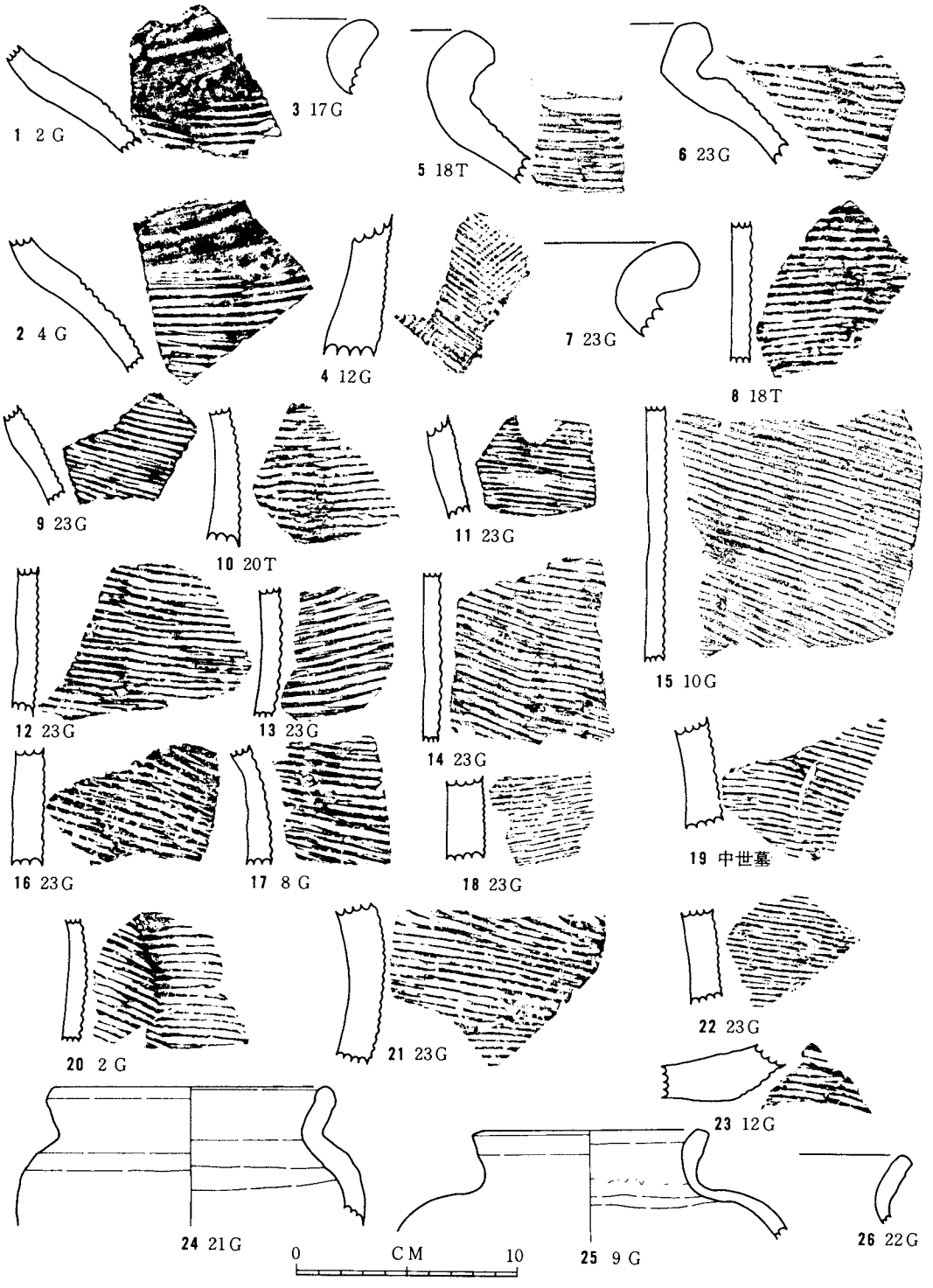
時期＼器種	甕			壺			鉢		
	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部
I					1		1		
II		T一括 4					1	1	
III	1						1		
IV	1						2		
V	2			3			9.7		11
VI									

3．中・近世の遺物[14]（第14～24図、図版13～19）

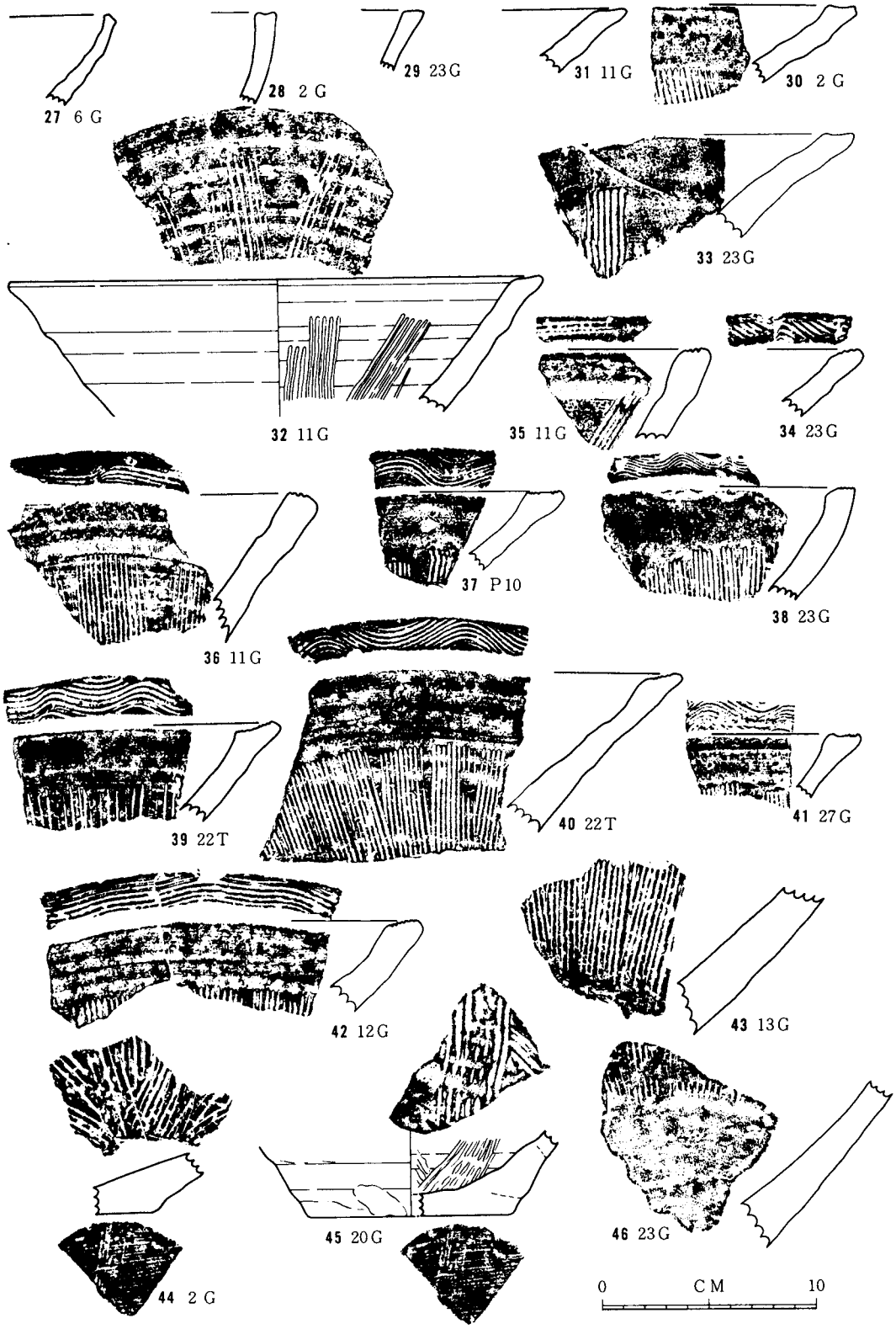
珠洲焼[15]（第14～16図）は出土遺物のなかで、土師質土器、越前焼についで出土点数の多い遺物である。Ｉ期（12世紀）からＶ期（15世紀）までに分類されるが、前半代の資料は少なく、Ｖ期に所属するものが大半である。大甕・壺・片口鉢の基本的な器種が揃っているものの、Ｖ期の片口鉢が特に多いのが注意される。

第14図１・２は出土地点が２Ｇと４Ｇと離れた位置で出土しているが、同一個体片で接合することができる。Ｉ期に所属する壺で口頸部分にあたる。３は甕の口縁部片で、III期に所産するものであろう。４は同時期程度に位置づけられる、底部に近い胴部片である。５は角張った口縁形を持つ甕でIV期に所産するもので、６・７の口縁は反転は著しいものの丸味を帯びてくるＶ期に所属する甕であろう。８～22までは甕、壺の胴部片である。破片のため条線状叩きの単位を観察するのは困難であったが、14は６条、15・21ではともに10条単位のものであった。Ｖ期に所産するものであろう。23は底部片でＶ期に属する甕底部であろう。20の内面には漆膜片がこびり付いていた。甕と壺の色調は淡灰色、淡青灰色、濃青灰色まであり、胎土、焼成は良好なものが多い。

24～26はＶ期に属する小型壺である。24は口径13.0cm、胴部径15.6cm、現高6.3cmを測る。口頸



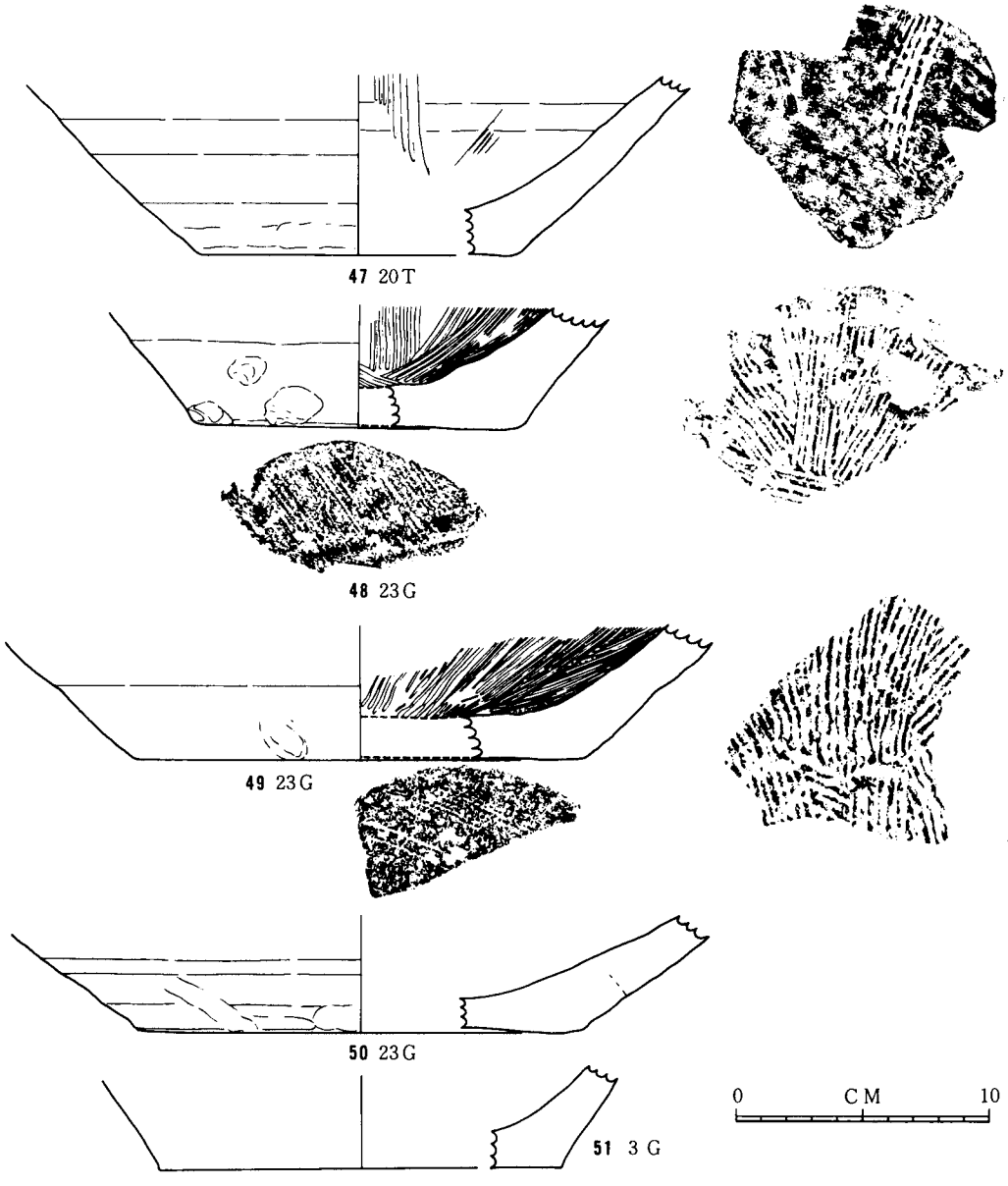
第14図　珠洲焼壺・甕実測・拓影図(1)（1／3）



第15図　珠洲焼鉢実測・拓影図(2)（１／３）

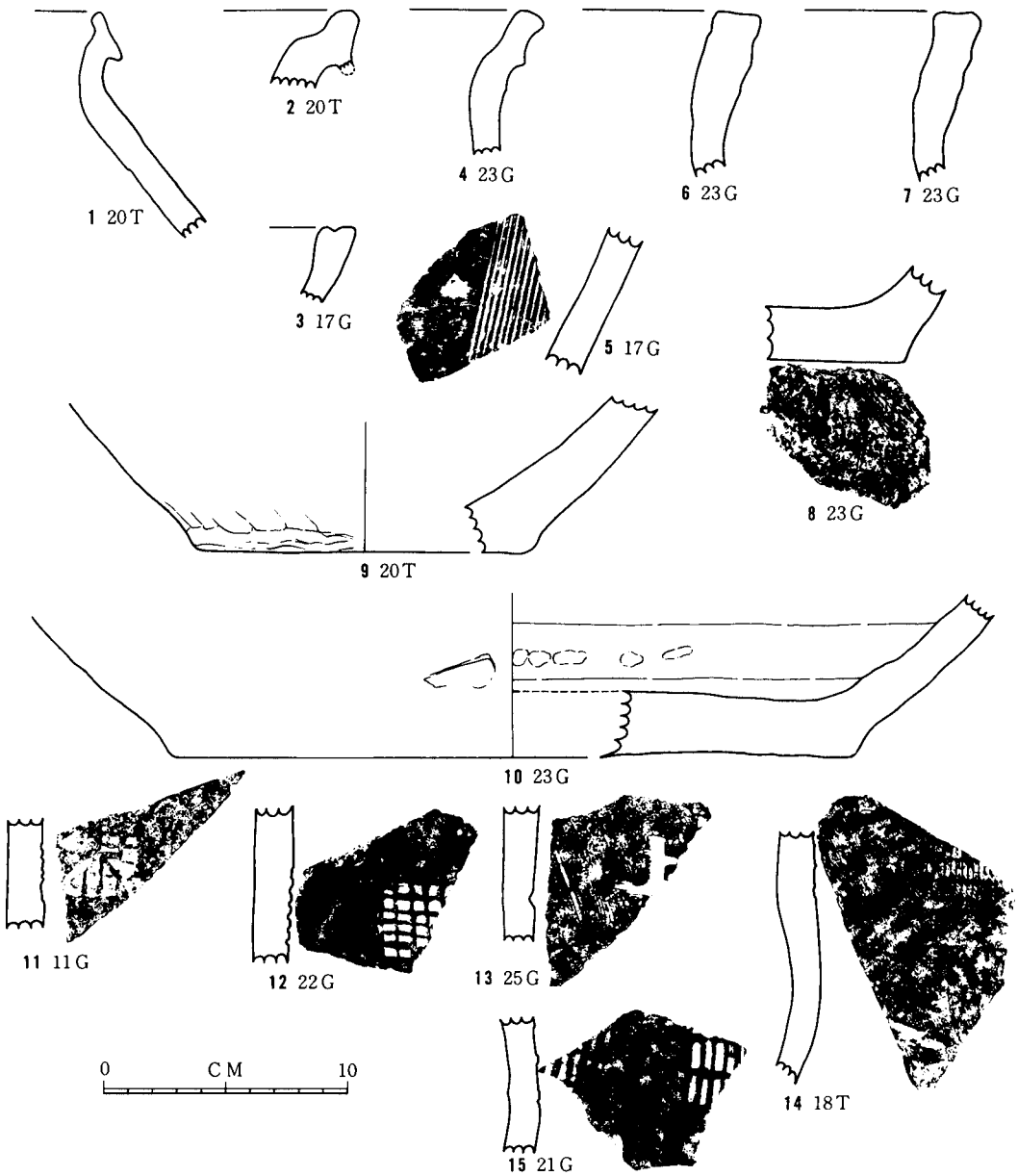
部が弱くくびれ、外反して立ち上がる口縁部の端部は丸くおさめられる。胴部には横ナデが強く入れられている。器壁は約1.0cmを測り、きわめて厚手のものである。色調は灰褐色を呈し、胎土、焼成とも良くない。25は口径10.6cm、胴部最大径17.4cmを測る。器壁は薄手につくられ、大きく張り出す肩部から、内側にめり込むように頸部がつくられ、外反気味の口縁がつくられる。口縁端部に平坦面がつくられ器壁が厚くなる。内外面とも横ナデ調整が施される。青灰色を呈し、胎土は良好で、焼成は堅緻である。26は25と類似する。

第15図27はⅠ期の片口鉢口縁である。口唇端部に面とりが施されている。濃青灰色を呈し、胎土は良好で焼成は堅緻である。28・29はⅡ～Ⅲ期に属する片口鉢口縁である。30～33は口唇部が



第16図　珠洲焼鉢実測・拓影図(3)（1／3）

素文のもので、32はⅤ期に属する小型片口鉢である。口径25.2cmを測り、器体の凹凸はさほど激しくはない。内面には間隔をおいて1.8cm幅6条の卸し目が施される。34は口唇部にスタンプによる装飾が入れられるⅣ期にさかのぼるものである。35・36は同一個体片で、口縁内面に段状の起伏が見られ、卸し目はその位置から密に施されている。濁褐色を呈し、他の製品とは異なる色調を持つ。37・39～41は先端基部をつよく押さえ端部が拡張して嘴状となるタイプで、大きな波状文が入れられる。卸し目は位置をそろえて施され、39では2.7cm幅で7本、40では2.1cm幅で9本の荒い櫛歯が用いられている。38は口唇部分を肥厚させないタイプで、小さな波状文が入れられ



第17図　越前焼・加賀古陶実測・拓影図（1／3）

ている。卸し目は2.0cm幅で10条単位であった。42では口唇部の装飾が直線的に引くだけとなる。43・46は片口鉢の底部近くの破片で、使用によって平滑に磨耗している様子が良くわかる資料である。45は底径9.8cmの底部片で、外周に指で押さえた痕がのこる。これは、48～50でも同様であった。底部の切りはなしは、44・45・48・49で静止糸切りの痕跡を見ることができる。45の卸し目は3cm幅で7条、48では底径13.0cm、卸し目は2.0cm幅で7条、49では底径18cm、卸し目は2.4cm幅で8条と観察された。50は使い込まれていて平滑となり、卸し目を見ることはできない。色調は淡い褐色を呈する47から、暗灰色の48があるが、おおむね灰色を呈するものが多く、焼成は全体的に若干あまいようだ。

51は底径16.2cmをはかる壺の底部片である。

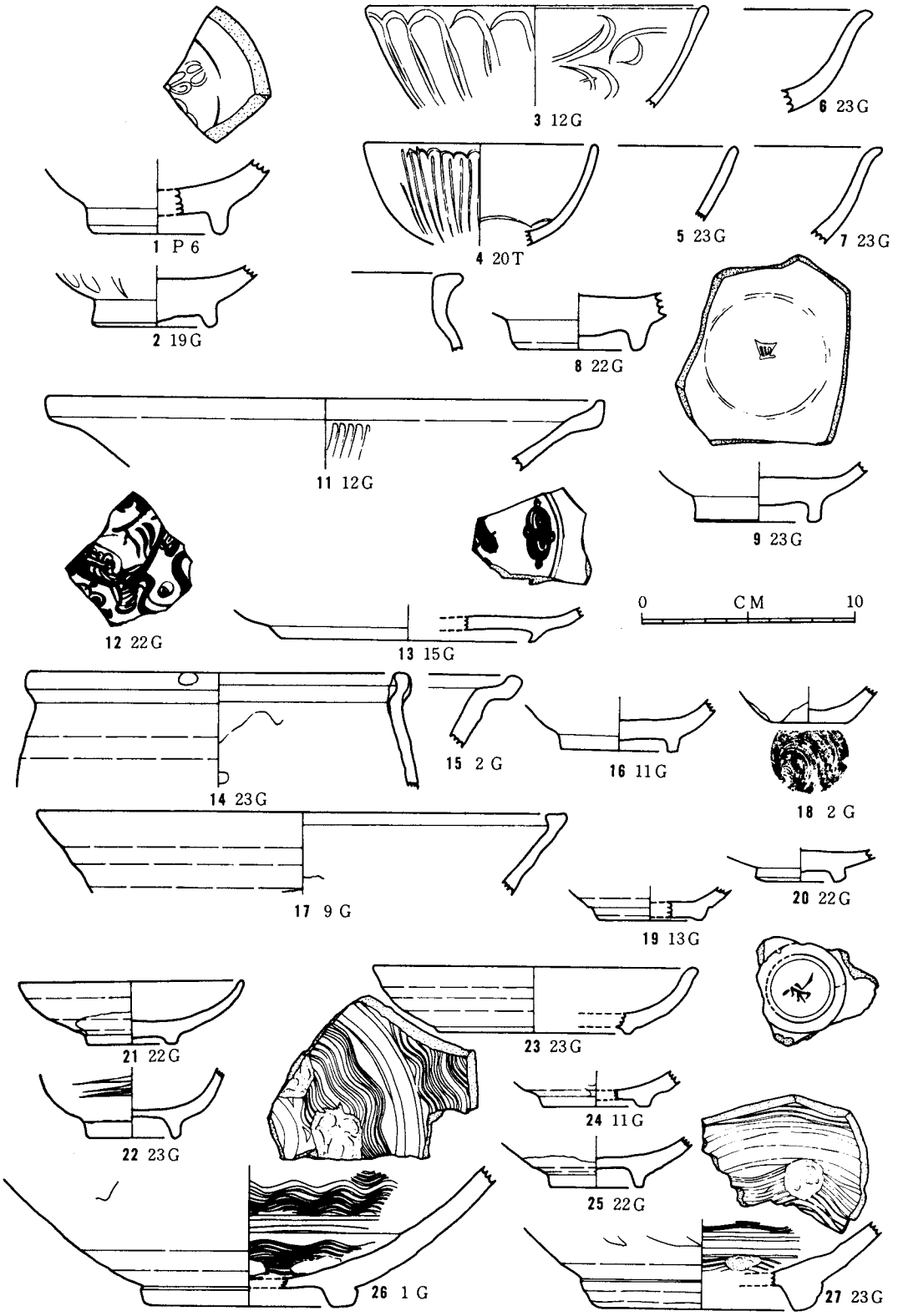
越前焼[16]は土師質土器についで出土量の多い遺物で、整理箱に1ケース分を見るが胴部破片が多く図示されるものはきわめて少ない。

第17図1・2は14世紀（南北朝時代）に想定される大甕の口縁部片である。先端をN字状に折り返して縁帯をもうけ、2では内面に段がもうけられる。外周には濃緑色の灰釉が流れているが、内面は濃茶褐色を呈して焼成は堅緻である。3は同じく14世紀代の擂鉢口縁部片である。4・5は15世紀代（室町時代）の大甕と擂鉢である。4は暗青灰色、5は茶褐色を呈している。6・7は板状に伸びて肥厚し、端部が平坦につくられる16世紀代(室町時代)の大甕口縁である。8～10は甕の底部で、9は底径14cm、10は底径28.0cmを測る。

11～13は押印の拓影で、11は格子目のなかに「木」が読みとれる。13は格子目押印のわきにおかれた「上」の字であろう。

加賀古陶の出土は少なく、23片を数えるにとどまる。そのなかで押印のあるもの2点を図示した。14は13世紀後半代、15は14世紀前半代にそれぞれ位置づけられよう。

青磁[17]（第18図1～11）の出土は95片を数え、舶載磁器のなかでは最も量が多く器種も豊かである。各発掘地点から平均的に出土し、遺跡の立地条件から全形をうかがうものはなく小片となるものが大部分であった。1・2は明代（14世紀）の浙江省竜泉窯の製品と見られるもので、1の見込みにはスタンプ文が認められる。釉は概して薄く、高台内面にも軽く付着していて、色調は黄緑色を呈している。磁胎は薄鼠色を呈し、ガラス状の割れ口を見せている。3～11は福建省産のものと見られるもので、磁胎は白色に近い4のものから濁茶褐色の焼成のあまいものまで幅が大きい。そのなかで薄鼠色を持つものが多い。釉の色調は枯葉色、濃緑色、緑灰色などがあり、釉の厚みは薄いと言える。8・9の高台内面には釉はかけられていない。3は口径16cmをはかる蓮弁文碗で蓮弁のレリーフは簡略化していて、鎬手が粗雑である。内面にもレリーフが施されている。なお、鎬手のはっきりした蓮弁を持つ口縁部片が2点出土している。4は口径11.2cmを測る小振りの蓮弁文碗で、レリーフの部分に厚く釉がかかり表面ではさほど凹凸が見られない。同様の手法・文様をつける口縁部片は他に4片が知られる。図示しなかったが雷文碗の破片2点が



第18図　青磁・青花・瀬戸・唐津焼実測図（1／3）

ある。6・7は口縁部端で急激に外反する碗器形をとるもので、図示した他に口縁部片2点の出土があった。5は素文のもので、他に口縁部片2点の出土があった。9は高台径5.8cmのもので、見込み中央に「皿」の字状の刻印を見ることができる。10は香炉の口縁部片で、他に算木文香炉の胴部片1点がある。11は口径26.4cmを測る盤である。その他の器種では花文皿の口縁部3点、双耳瓶口頸部1点がある。以上の青磁は15～16世紀代に想定して良いであろう。

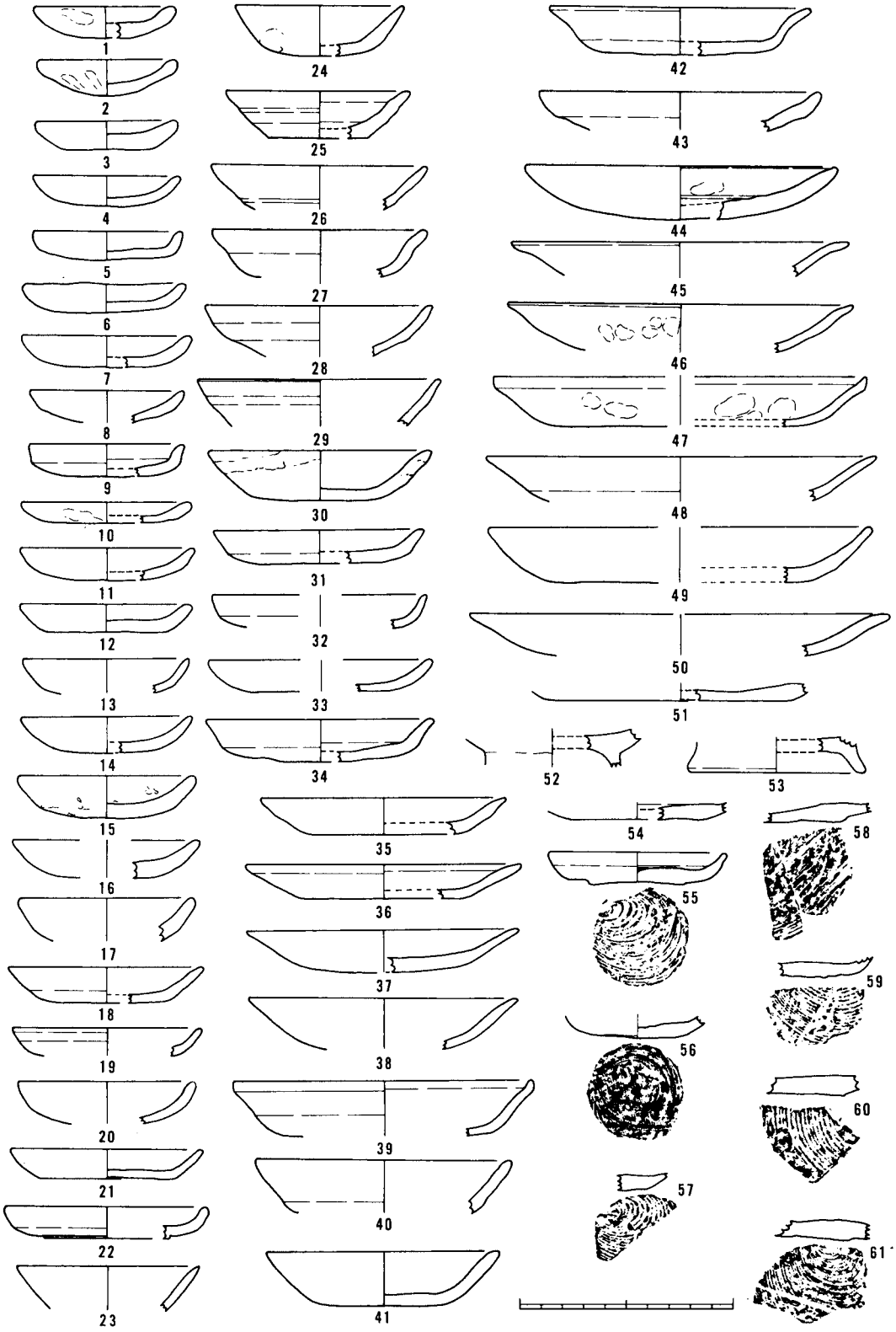
褐釉のかかった天目碗も6点の出土がある。磁胎は薄鼠色を呈し、焼成は堅緻である。

12・13は明代の青花皿、見込みの部分である。12では獅子をうかがうことができる。13は高台径12.0cmを測り、高台端が鋭さをもっているのが特徴的である。16世紀後半代の時期が相当する。他に、3点の出土がある。

14～20までは、美濃・瀬戸窯の製品で、黄緑色の灰釉がかけられている。図示する口縁部片が見あたらなかったが、茶褐色の鉄釉を施釉した資料も15点ばかり得ている。全体には水引き轆轤成形による器面の凹凸が顕著で、18のように回転糸切り手法を持つものがある。14は口径18.2cmを測る片口鉢と推定される資料で、口縁端を平たく成形し内面に段を置く。口縁帯は短かく小さくくびれて胴部へとつながる。片口部分は内面の段がなくなり、外方へ向いて釉が認められるところから推定された。15・17は大型の平鉢で、15は大きく外展する口縁の端部が折れて小さく伸びておさめ、口縁内面に幅の広い段がつくられている。17は口径25cmを測るもので、口縁端部が内面に突出して幅のある口唇部分をつくる。外周は水引き成形のあとを残すが、内面はナデ調整を施して成形痕をとりのぞいている。14は高台径5.6cm、高台高さ0.6cmを測る。20は高台径4.2cmを測るもので、高台内部に「永」の字が墨書されている。陶胎は薄茶白色を呈し、釉は白色に発色している。図示した他に小皿、卸し目をつけたものがある。釉の色調は淡黄緑色が大部分で、釉が厚くかかった部分に濃緑色、薄いブルーを呈しているものもある。

21～27は、17世紀後半から18世紀代にかけて所産した唐津焼である。21は口径10.6cm、器高2.9cmを測る皿で、釉は薄い灰色で素地の茶褐色をすかしている。釉は全体に薄く高台周辺にはかけられてはいない。22は高い高台のつく碗で、全体に薄鼠色と褐色の釉がかかり、器表上面は鎬状をなす。23は口径15.4cm、器高3.1cmをはかる21より大振りの皿で、火熱を受け釉の退色が著しいものである。26・27は刷毛目唐津と通称される鉢の底部と推定される。口縁端部が大きく外展して内面に段がつけられ、口唇部が若干肥厚する口縁がつく。陶胎の色調は暗褐色を呈している。内面には窯体内での接着を防止した痕がのこされているのは、特徴的な事である。26・27とも高台径は10cmを測る。

近世以降の陶磁器は破片だけではあるが300片近くを得ている。しかし民窯その他の研究が進展していないため、出土しているとするにとどめた。



第19図　土師質土器実測図・拓影図(1)（１／３）

土師質土器（第19・20図）は出土品のなかでは最も多く2652片を得ているが、小片までをも含めているので、相当数を割り引いて考えなくてはならない。出土する地点のバラツキは大きい。５～７Ｇの東側で検出した溝状遺構からの検出が最も多く、溝の性格を考えるうえで注意しなければならないであろう。口径の大小を基準として、Ⅰ～Ⅴ類までに分類した。Ⅰ類（第19図１～３）は器壁が0.8cmと厚くつくられ、口径が７cm以下で、器高1.7cmにとどまるもので、底部は平坦面をつくらず指ナデで成形しているのが、２では特に良く観察される。胎土には大きな砂粒は見られないが、Ⅱ類以下と比較して粒子は荒く、焼成は良く器肌面は旧状を保っている。

Ⅱ類は４～25までの口径が10cm以下のものとした。器高は最大値で2.4cmで、1.5cmが大きな部分を占めている。口縁が大きく伸びて杯型態に近くなる23・24が見られ、口縁部が屈曲して立ち上がる５・９があり、明らかに平底をつくり出す18・20・25が見られる。回転糸切りを施すものは22・55があり、削り高台のように体部との間に段をつくるのが知られる。これらの小さな差はあるものの、器壁は概して薄くつくられ0.4cm程が平均値である。色調は赤褐色から灰褐色までの幅があり、胎土はきわめて良く水こし精選されているものが多い。焼成は良いが、胎土が柔かいため器肌は風化していて、調整を観察するのは困難であった。以上の事はⅢ類の資料についても同様の事実を指摘することができる。

Ⅲ類は口径が10cm以上になる類をまとめた。杯状になるａ類（30・34・38～42）と口縁が外へ伸びてⅢ状を呈するｂ類（37・43～50）が知られる。内面に横ナデを入れ、外周の底部近くに指頭による押さえが見られる44・46・47があった。

Ⅳ類は高台をつける52・53をまとめた。

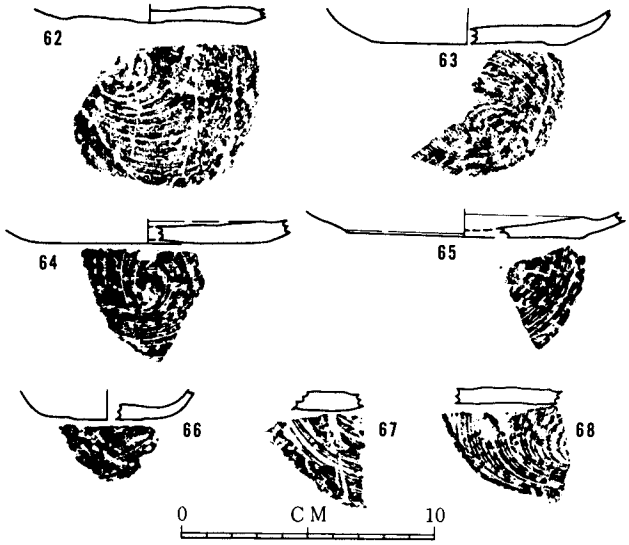
回転糸切り痕をのこす類（55～68）は、Ⅱ・Ⅲ類ともに認められているが、全体としては少ない部類に入れられる。

第５表　土師質土器計測表

番号	口径	器高(cm)	出土地点	備　考
1	6.7	1.5	21Ｇ	
2	6.6	1.7	13Ｇ	
3	6.8	1.4	27Ｇ	
4	6.8	1.4	18Ｇ	
5	7.2	1.3	8Ｇ	
6	7.6	1.4	17Ｇ	
7	8.0	1.5	2Ｇ	
8	7.2	1.5	18Ｇ	
9	7.2	1.5	8Ｇ	
10	8.0	1.0	7Ｇ	
11	8.2	1.5	3Ｇ	
12	8.1	1.3	7Ｇ	
13	7.8	1.6	14Ｇ	燈芯油痕あり
14	8.0	1.7	18Ｇ	
15	8.4	2.0	23Ｇ	
16	—	1.8	13Ｇ	
17	8.4	—	22Ｇ	
18	9.2	1.7	15Ｇ	
19	8.8	1.3	5Ｇ	
20	8.4	2.0	Ｐ—14	27Ｇ
21	9.0	1.5	Ｐ—13	27Ｇ
22	9.6	1.5	5Ｇ	
23	8.6	—	11Ｇ	燈芯油痕あり
24	8.0	2.4	12Ｇ	
25	8.6	2.2	5Ｇ	
26	10.2	—	20Ｇ	
27	10.2	—	2Ｇ	
28	10.8	—	5Ｇ	
29	11.6	—	5Ｇ	
30	10.6	2.3	10Ｇ	
31	10.0	1.6	11Ｇ	燈芯油痕あり
32	—	—	5Ｇ	
33	—	1.5	13Ｇ	
34	10.8	2.0	10Ｇ	燈芯油痕あり
35	11.6	1.7	21Ｇ	
36	13.0	1.6	Ｐ—２	27Ｇ
37	12.8	2.0	19Ｇ	
38	12.8	2.5	27Ｇ	燈芯油痕あり
39	14.2	2.6	7Ｇ	
40	12.2	—	23Ｇ	
41	11.2	2.6	14Ｇ	
42	12.2	2.3	23Ｇ	
43	13.2	—	7Ｇ	
44	14.6	2.5	22Ｇ	
45	17.8	—	Ｐ—12	27Ｇ
46	16.2	—	20Ｔ	
47	—	2.3	7Ｇ	
48	18.2	—	15Ｇ	
49	—	2.6	5Ｇ	
50	—	2.0	23Ｇ	
55	8.4	1.5	7Ｇ	

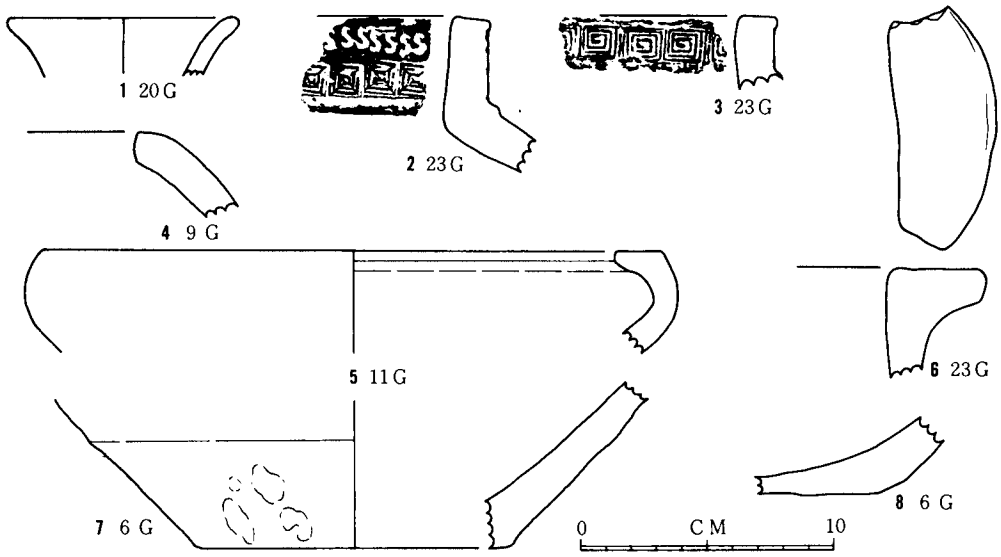
明瞭に燈芯油痕を持つものは意外と少なく、図示したなかで5例をあげるにとどまる。

土師質土器の出土は、近年の調査の進展にしたがいその例は増加している。鶴来町日詰遺跡、七尾市小島遺跡、羽咋市寺家チョウエイジ遺跡[18]、穴水町白山橋遺跡[19]等で出土が報告され、従来言われてきた炉明皿としての機能だけにとどまるものではないとの見解が多く出されてきている。100個体近くが一括して発見された金沢市大場遺跡などの例や、七尾市能登国分寺跡、七尾市源田山中世墓址などの宗教的な遺跡での出土も多く知られてはいるが、共伴する資料が少なく器形の変化も微妙である事から編年作業は進んではいない。西川島遺跡の資料から四柳嘉章氏[20]が穴水町地域と限定しているものの、土師質土器編年試案を呈示されているのは、今後の調査を待たねばならないものの各地域で進めなければならない課題である。それらの進展によっても、先の問題への手掛りは十分得られるものと思う。



第20図　土師質土器拓影図(2)（1／3）

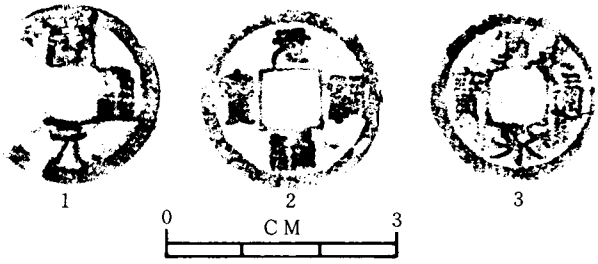
瓦器（第21図）の出土は10点が知られる。均一な微砂粒を包含し、低温の燻焼成による較質土器で、黒灰色、灰色、黒褐色を呈しているのが多い。1は口径9.2cmをはかる壺口縁部である。外周は入念なヘラ磨きが施されている。2～5は火鉢の口縁部片である。2・3の口縁はまっすぐ



第21図　瓦器実測図・拓影図（1／3）

に立ち口唇部は平坦に磨かれ、低い突帯で区画された口縁帯にスタンプ文を押印するものである。２の上部には２個一対のＳ字状文、その下には1.4×1.3cmの連繋角形文が押印される。３では連繋角形文1.4×1.8cmの単位で押印している。２の頸部は外周をヘラ磨き、内面はナデが施されている。４・５は弧状を描いて内屈するタイプで、４の口唇部は面とりがなされ、５では内側へ引き伸ばされ口唇部を広くしている。口径24.5cmをはかり、内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。６は釜の口縁部分と推定され、大きく外延して弧状の把手状のものがつけられている。内外面とも粗雑なナデ調整が入れられ、内面下部に幅1.2cmに８本歯の刷毛状工具による横方向の荒いナデを見ることができる。７・８は内面が使い込まれて磨耗し平滑となった擂鉢の底部片である。擂鉢には荒い卸し目をつけているもの１例がある。その他の瓦器にはバンボコかと推定されるものも１点出土している。

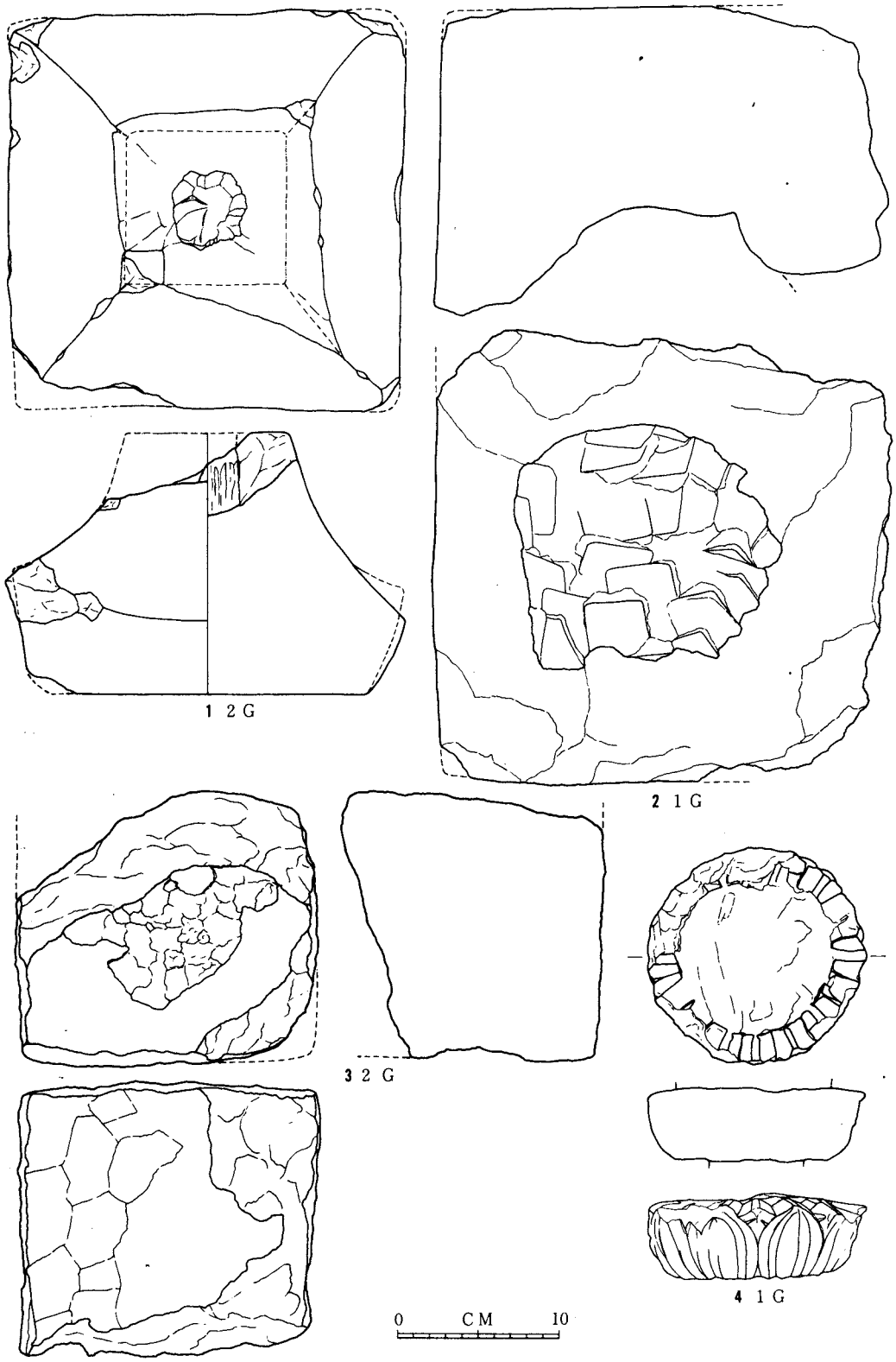
銅銭は５点の出土であるが、うち２点は破砕していて判読できなかった。１は27Ｇから出土した開元通宝で、隷書体の唐代（会昌５年以降、西暦845年）のものと推定される。２は２Ｇから出土した北宋銭の篆書体の元祐通宝である。初寿年は元祐元年（西暦1086年）である。３は９Ｇから出土した江戸時代の寛永通宝である。



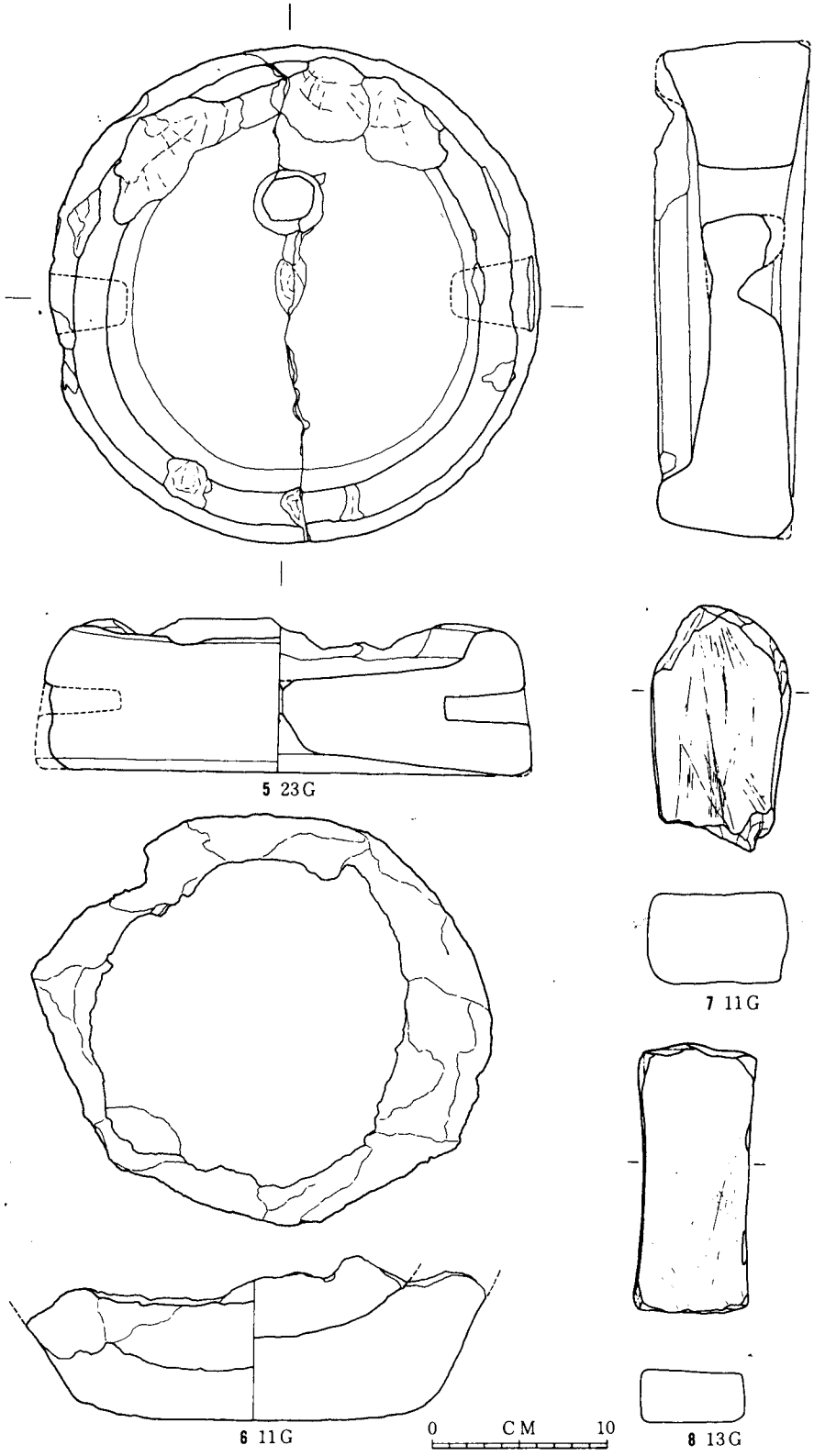
第22図　古銭拓影図（１／１）

五輪塔を代表とする石造遺物は(第23図)は、計４点を得ている。それぞれが単独で出土しているため、塔の全形を推定するのは困難である。石質は全てが凝灰岩質であった。１は五輪塔火輪で、上端部と側縁をわずかに欠いているだけで、全形をうかがう事ができる。軒口を斜めに切った様式で、軒上端幅24.0cm、器高15.9cm、下端幅約19.2cmで平面正方形を呈す。上端幅は推定で9.4×9.8cm、風輪と接する上面には4.4×4.8の不正方形の穴が穿たれ、深さは５cmをはかる。器表面は磨かれ工具の痕跡を見ることはできないが、下半にはわずかに痕跡が残されている。２は五輪塔の地輪部分で、側縁部と下端を欠いている。現器高18.5cm、現況幅27.6cmをはかる。下面の中央部に14.7×15.7cmの不正円形に、深さ6.5cmまで掘りくぼまれていて、幅４cmの工具のあとが生々しく残されている。器表面をのこす部分は磨かれている。３も同じく五輪塔地輪部分で現器高14cm、幅18.2cmをはかる。全体に欠損が多く、下面に工具痕を認めるにとどまる。４は宝塔部分の請花と推定される。径13.2cm、器高4.4cmを測る。

第24図５は23Ｇから２個に割れて出土した石臼の上臼（雌臼）である。外径28.4cm、くぼみの上端径は21.3cm、下場径19.1cm、深さ3.5cmをはかる。上縁はなだらかな堤状をなし、下幅3.4cm、高さ1.9cmをはかる。くぼみは皿状を呈していて中央部分が最も深い。供給口は中心点と上縁の中に位置し、3.7×4.0cmの楕円形に掘り下げられている。上臼のふくみの高さは1.1cmをはかり、使



第23図　石造遺物実測図(1)（1／4）



第24図　石造遺物実測図(2)（1／4）

い込まれて平滑な面を見ることができる。供給口の下からは、幅3.5cm程度の溝が弧状を描いて左方向になだらかに掘りくぼめられ、石臼が逆時計まわりのするものと推定される。芯棒受けは径4.5cm、深さ2.4cmをはかる断面円錐形状を呈している。挽き木は横打ち込み式で、側面の中央に対応する２個がうがたれている。平面形は長方形を呈し4.3×2.1cm、深さ4.7cmをはかる。石臼が２個に割れているのは、食物を扱う道具としての臼を神聖視して、二つに割る事によって石臼の魂をぬくといった儀礼が考えられている。[21]

６は11グリッドの１号配石址の近くから出土した石鉢である。上半部を欠いているため全形は不明のため、便宜的に石鉢としておく。現況での外径26.5cm、現況での器高は9.5cmをはかる。石材は凝灰岩質の比較的細工のたやすい石質で、中央部分が鉢状にくぼんでいる。底面は丸味を帯びてはいるが安定している。

７・８は砥石と推定されるもので、７は細粒砂岩、８は凝灰岩でつくられている。７は上面と両側面、８は四面が使用され平滑となっている。７の端部は不規則な打痕が認められる。

その他の遺物には、馬歯、漆膜片、鉄器片があるがいずれも原形をとどめてはおらず、図示する事ができなかった事をお断りしておく。

Ⅵ　ま　と　め

白山遺跡・白山町墳墓遺跡の発掘調査は、幅１ｍのトレンチを延長約 450ｍ のなかに長さ10ｍのものを22本設定する事によって出発し、水道管埋設による幅４～５ｍ、延長約 150　ｍの範囲に事前調査を実施するにとどまった。長大なトレンチから知られた土層の堆積は、河岸段丘の微妙な変化をさし示すものであったが、十分に理解し本調査に生かしきれたとは言い難い。それは検出された配分址の所属年代を土層の堆積と整合させるのが困難であるという事にあらわれており、本遺跡の構造や性格を知るにはトレンチ調査による発掘では十分とは言えない事を示している。本報告書は事実を記して、今後の調査の一里塚となるように心がけた。それは本調査の行なわれた昭和54年のあくる年に、水道管と併行して鶴来バイパスの建設にかかる緊急調査が実施され、河岸段丘面端部に縄文時代後・晩期の集落址と中世墳墓、墓道、石室等の中世の遺構が顕現され、遺跡の解明にむけて大きな足掛りが得られたからである。昭和55年度の第２次調査の成果をまじえて、本遺跡をめぐる問題点を略記していく。

本遺跡から出土した遺物は、整理箱７ケースという極く少量ではあったが、縄文時代、古墳時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、近世までの多様な土器、陶磁器が見られ、複合遺跡である事を示している。これは、手取川の上流域白山麓への入口として、本遺跡の地理的環境が大きく作用しているものと考えられる。また、出土した陶磁器類に完形品は見られず、少片となって流れ込んだ状況が推定され、手取川の氾濫や小河川の影響が考えられる。

検出された遺構は石段状遺構、溝状遺構、５基の配石址と小ピット群である。遺構相互の関連はトレンチ調査の性格から明快には示し難いが、発掘区北方部の配石址は群を形成するものと思われる。その配石址は２類に分類され、立石する１・５号（Ⅰ類）、平面的に並べる２～４号（Ⅱ類）の２形態である。55年度の第２次調査でも１号配石址の西南方向約10ｍの位置に、Ⅱ類のもの一基を発掘している。配石址の所属する年代は１号配石址の周囲に珠洲焼擂鉢（第15図32）を検出しているのが唯一の手掛りで、室町時代（15世紀）に比定できるものの、他の配石址にまで及ぼすのは危険であろう。また、一方では４号配石址を人為的な所産とするには若干抵抗をおぼえる点も否定できない。

第２次調査で検出した中世墳墓（図版20参照）は、径60～80cm大の河原石で３×５ｍの長方形プランの区画をつくり50cm程度まで積み上げられており、短辺には石段状の配置も知られた。中心部分からはずれた位置に、火葬骨をおさめた珠洲焼壺底部を発見している。崩壊していた石に混在して五輪塔の空風輪、火輪、水輪等が出土している。墳墓から約２ｍ程度西側の斜面に、飛び石を配した幅約 1.5 ｍの道が南北方向に長さ約25ｍにわたって検出され墓道（図版21参照）と考えられ、覆土から永正18年（西暦1521年）の紀銘を持つ五輪塔地輪が得られている。供養された「勝運権少僧都」の名称が、以前から知られていた文明２年（西暦1470年）「□運権少僧都」を刻んだ五輪塔地輪と関連性が強いものと考えられた。白山比咩神社に保管されている承元３年

（西暦1209）から弘治２年（西暦1556年）までの白山寺荘厳講の衆徒が白山宮関係の事柄を記した「白山宮荘厳講中記録」には、「運」の一字を持つ人は数多く記されてはいるが、「勝運」は認められなかった。これは、白山町浄養寺境内に供養されている文明３年（西暦1471年）□□釈完尼の紀銘を持つ地輪の発見を含めて、中世史研究家の協力を得なければならない。

１・２Ｇで出土した石段状遺構は近世紀以降のものと推定されるが、５～７Ｇで検出した段丘裾にある溝状遺構が中世後葉(16世紀)の年代が想定され、両者を関連した遺構として考えた場合には前者がさらにさか上る可能性もあり得るとするにとどめ、第３次以降の調査に結論を待ちたい。

出土した縄文土器は少量ではあったが、推定したごとく第２次調査では中世墳墓の下層に、石囲い炉２基、埋め甕４基、土坑、住居址柱穴多数（図版21参照）が発掘されている。後期後半から晩期後葉の下野式期までの土器、石器、土製品がパンケースで60箱分が得られていて、手取扇状地扇端部の野々市町御経塚遺跡、金沢市八日市新保遺跡、同市中屋遺跡等と白山麓の鳥越村下吉谷遺跡、同村下野遺跡等をむすぶ接点としての特色が見い出せるのではないかと考えている。

古式土師器と須恵器の検出は少量にとどまるが、白山麓での出土がほとんど知られていない時期の資料であり、白山信仰が盛んになる以前の状況を考えるうえで今後の資料増加が待たれる。

今次調査での注目すべき資料は、多彩な産地を示す中世陶磁器類であろう。舶載磁器は100点以上を数えるうち、青磁の占める割合が最も高い。器形は碗形態が卓越するのは、金沢市普正寺遺跡と同じ傾向を示しているものの、双耳瓶の検出は県下では初例であり注目されて良い。時期は明代（15～16世紀）に集中するようであり、海港をひかえた普正寺遺跡との時期的な差が、流通経路を考えるうえで重要な問題を内包していると考えられる。また、瀬戸、美濃産の灰釉、褐釉、珠洲焼、越前焼等の日常雑器の市場占有の状況については、一括資料を欠く事から今後の調査成果を待ちたい。

第２次調査によって検出された紀年銘を持つ五輪塔が新たに２例追加され、紀年銘を持つ県下９例のうち５例が鶴来町に集中している結果となった。各地の五輪塔についても十分な調査が実施されれば、さらに増加するものと考えられる。

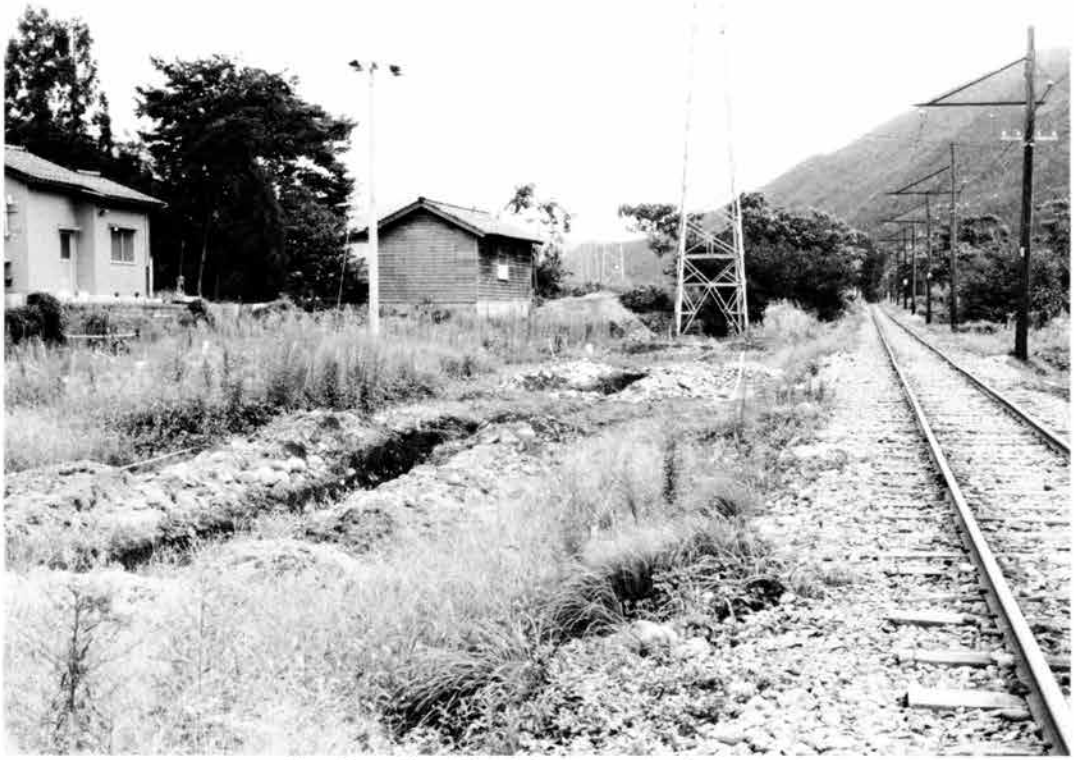
本遺跡は加賀の中世史に重要な位置を占める白山比咩神社と指呼の距離にあり、農耕神より出発し北嶺叡山と結びつき、在地荘園領主として勢力を伸ばした時期と併行する遺物の出土は少ないものの、遺跡周辺に「運」の名称を系統的に伝える社僧坊を想定しうると言える。また、白山麓に一向宗の浸透がはかられる室町時代以降の遺物は、15世紀前半代に位置づけられる資料が多く、16世紀では少なくなる傾向が認められる。手取川の溪口に標高193.9ｍ、比高約80ｍをはかる独立丘陵に占地する舟岡山城が一向一揆の拠点となってゆくのが、本遺跡の時期を区切る大きな要因である事は、疑う余地のない事であろう。

本報告書を記すにあたり、多くの方々の御教示を受けた。それらを誤認している事も考えられ文責が筆者にあることを明記し、大方の御批判をあおぎたい。

註(1)高堀勝喜　吉岡康暢　1968　石川県石川郡鶴来町白山上野住居址群　第１・２次調査概報
石川考古学研究会々誌　第11号
(2)高堀勝喜　1950　石川郡鶴来町舟岡山住居址遺跡の調査　石川考古学研究会々誌　第２号
(3)中島俊一　1975　安養寺遺跡群発掘調査概報（安養寺・柴木・部入道地区）　石川県教委
(4)湯尻修平　1975　安養寺遺跡群（上林地区）調査報告　石川県教委
(5)吉岡康暢　1963　鶴来町の古代中世遺跡　石川県立鶴来高等学校歴史部
(6)石川県教育委員会　1980　石川県遺跡地図
(7)平田天秋　1975　尾口村御所の館縄文遺跡　石川県教委
(8)中島俊一　1976　白峰村桑島・東島遺跡発掘調査報告書　石川県教委
(9)東四柳史明　1977　桑島館跡（資料編）　石川県教委
(10)三浦純夫　1978　象ヶ崎遺跡　「桑島の里」所収
(11)桜井甚一　1971　石川県銘文集成　中世金石文　北国出版社
(12)　(1)に同じ
(13)西野秀和・滋井　真　1980　北塚Ｂ遺跡（第II次調査）　石川県立埋蔵文化財センター
(14)先輩各位より御教示を賜った。特に吉岡康暢氏には、陶質土器の分類に立ち合っていただいた。記して、深謝しておきたい。
(15)吉岡康暢・平田天秋　1976　珠洲古窯跡　石川県珠洲市史第１巻
中島俊一・平田天秋・吉岡康暢　1977　珠洲法住寺第３号窯　石川県教委
(16)吉岡康暢　1970　普正寺　石川考古学研究会
(17)　(16)に同じ
(18)高　一男　1978　羽咋市寺家チョウエイジ遺跡　石川県教委
(19)高　一男　1977　穴水町・白山橋遺跡調査報告　石川県教委
(20)四柳嘉章　1980　西川島・Ｉ　穴水町教委
(21)三輪茂雄　1978　臼　法政大学出版局

遺跡周辺の航空写真（㈱セントラル航業撮影）

遺　跡　遠　景（舟岡山城をのぞむ）



遺　跡　遠　景（手前15トレンチ、南をのぞむ）

1・2Gの石段状遺構（北から）

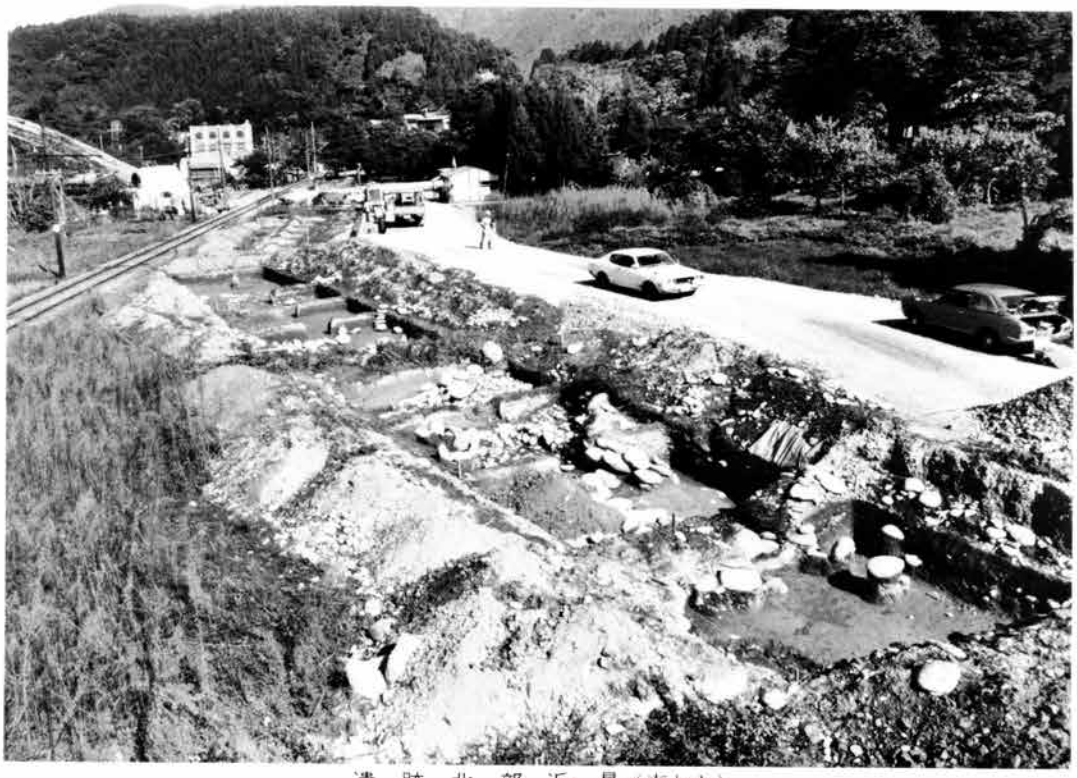
同　　上（西から）

7・8Gの作業風景（北から）

7　G溝状遺構（北から）

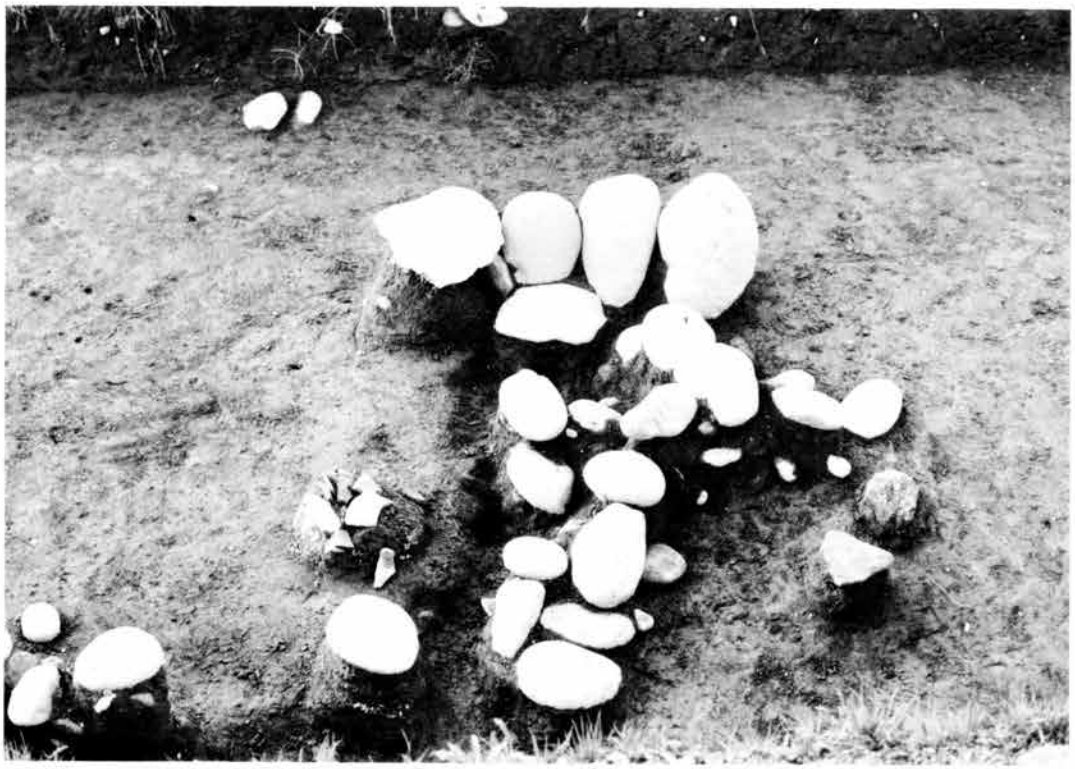
遺跡北部発掘風景（南から）

同　　上　　（同上）

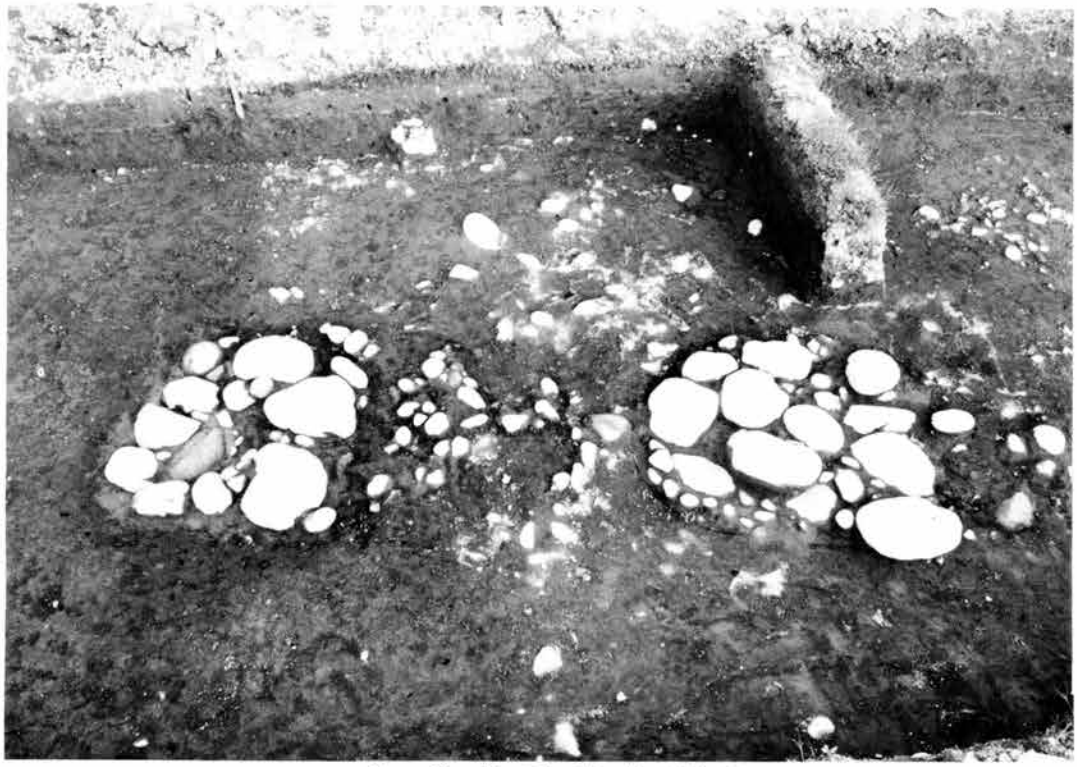


遺 跡 北 部 近 景（南から）

2・3 号 配 石 址（北から）

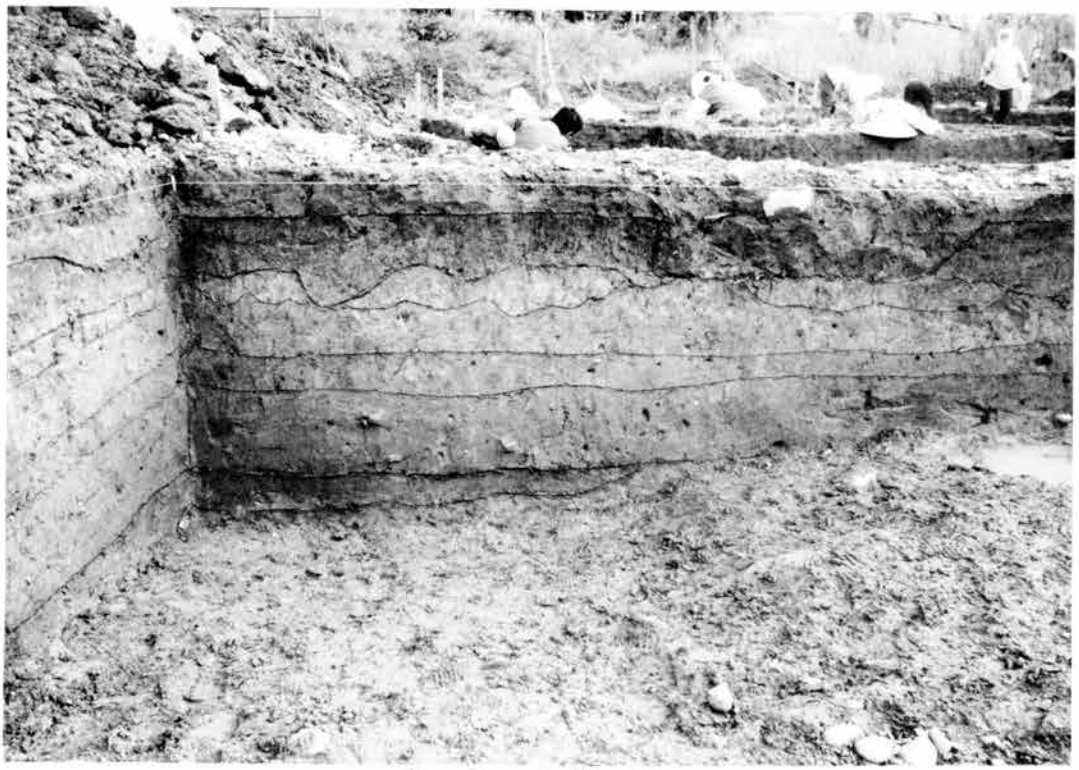


1 号 配 石 址（東から）



2・3 号 配 石 址（西から）

27 G のピット群



24 G 南断面

9～13Gの検出状況（南から）

4号配石址（西から）

5号配石址

22・23Gの検出状況（西から）

20～23Gの検出状況（北から）

〃

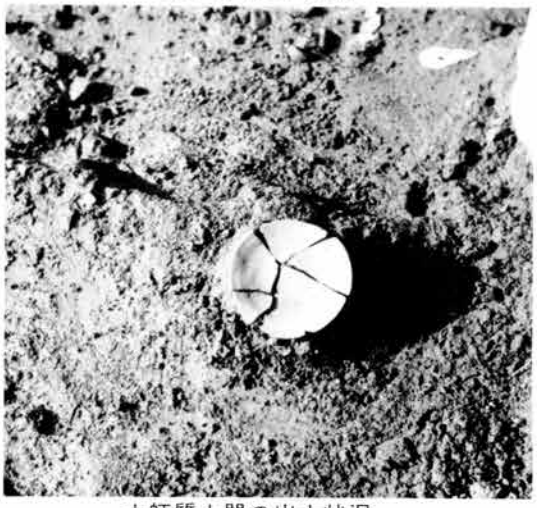
地輪の出土状況

宝輪の出土状況

石臼の出土状況

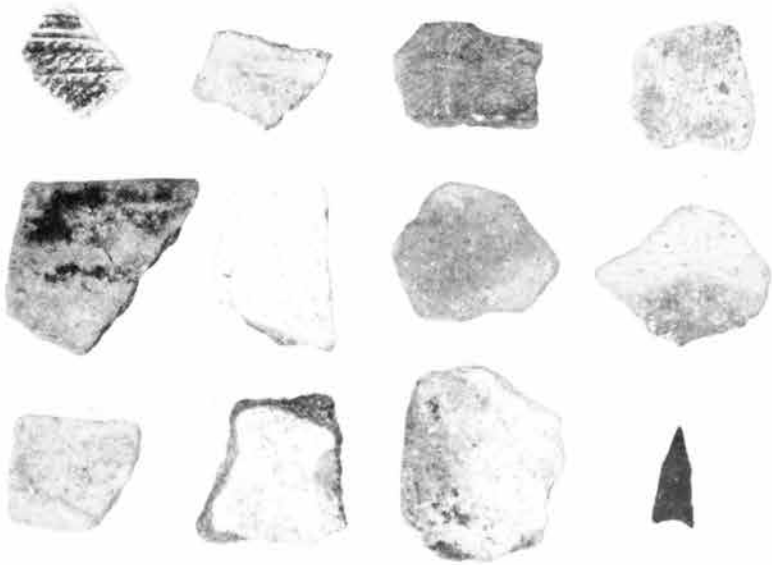
石鉢の出土状況

珠洲焼の出土状況

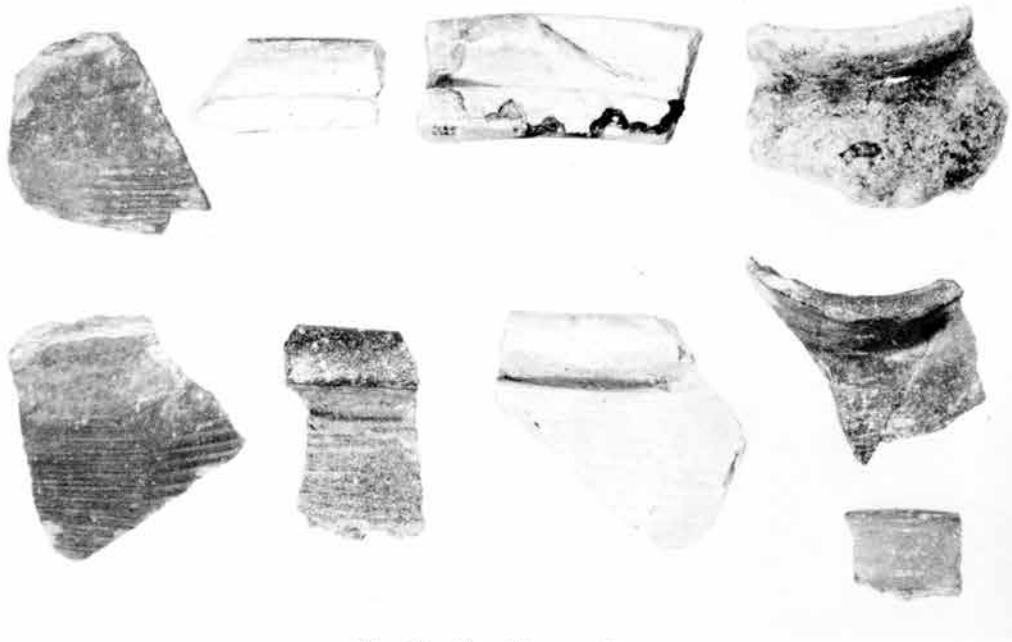


土師質土器の出土状況

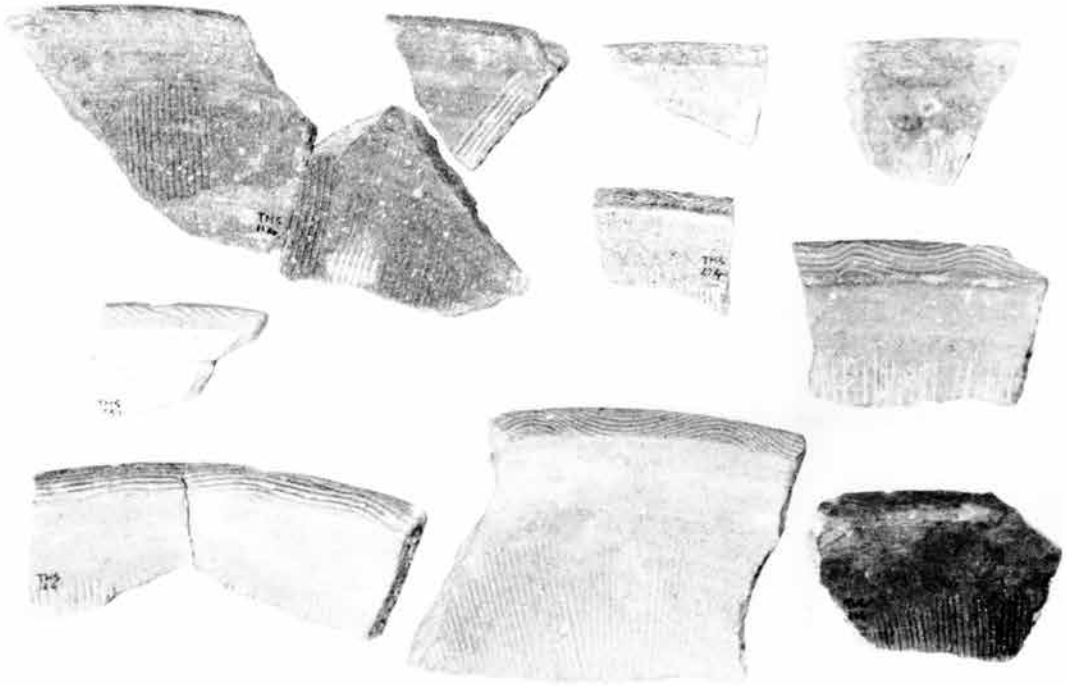
縄文時代の石器



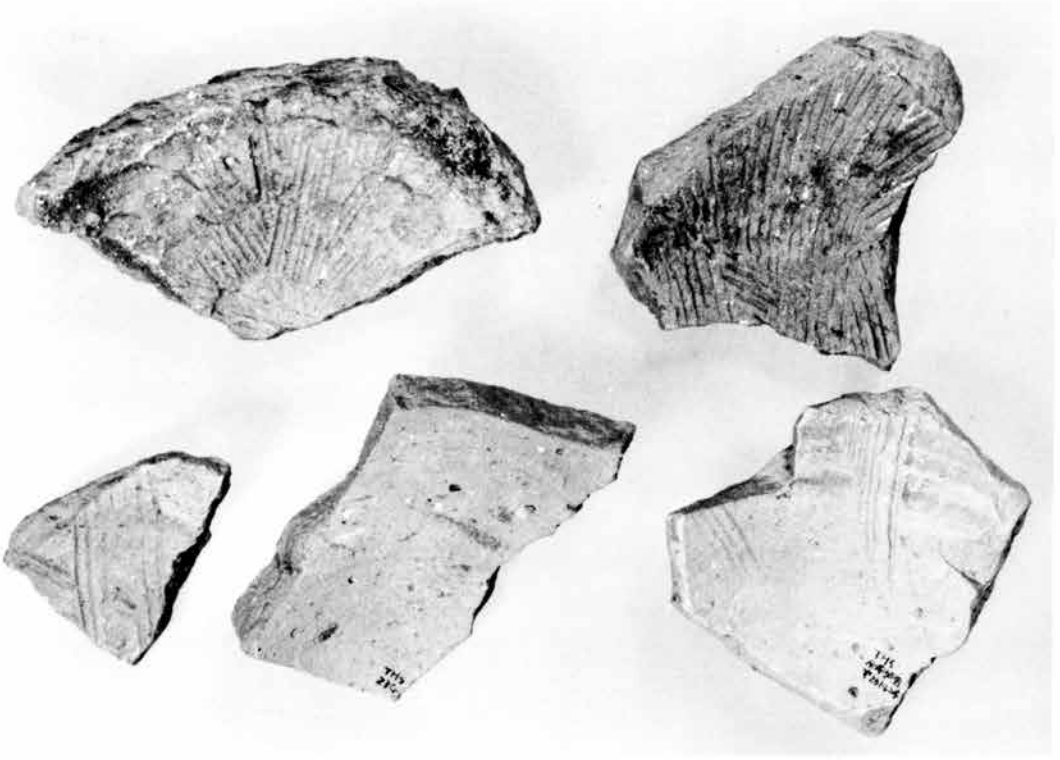
縄文時代の土器と石鏃



珠洲焼壺・甕

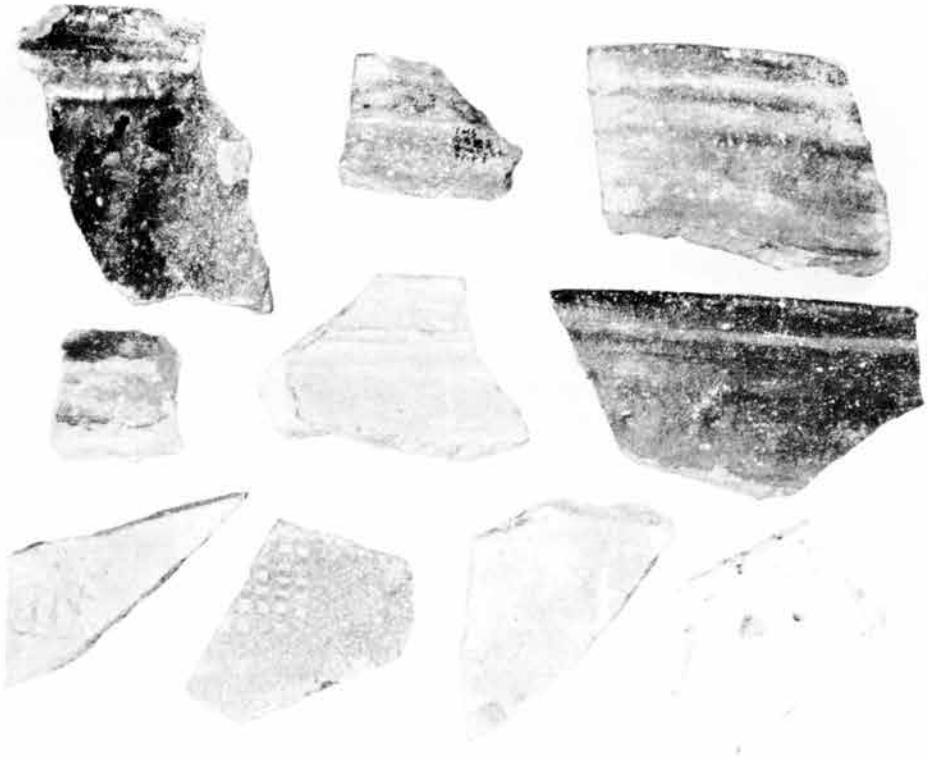


珠洲焼鉢

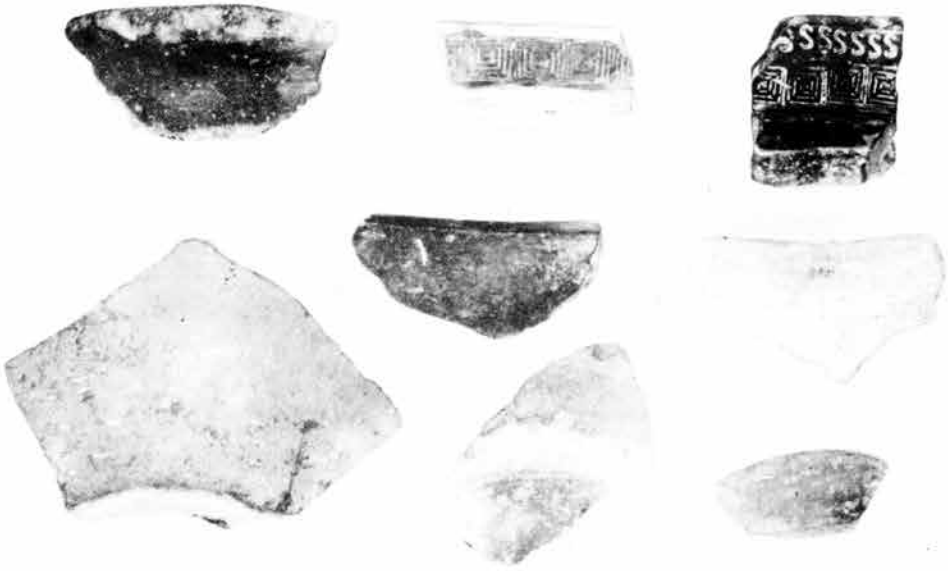


珠洲焼鉢底部

珠洲焼甕胴部

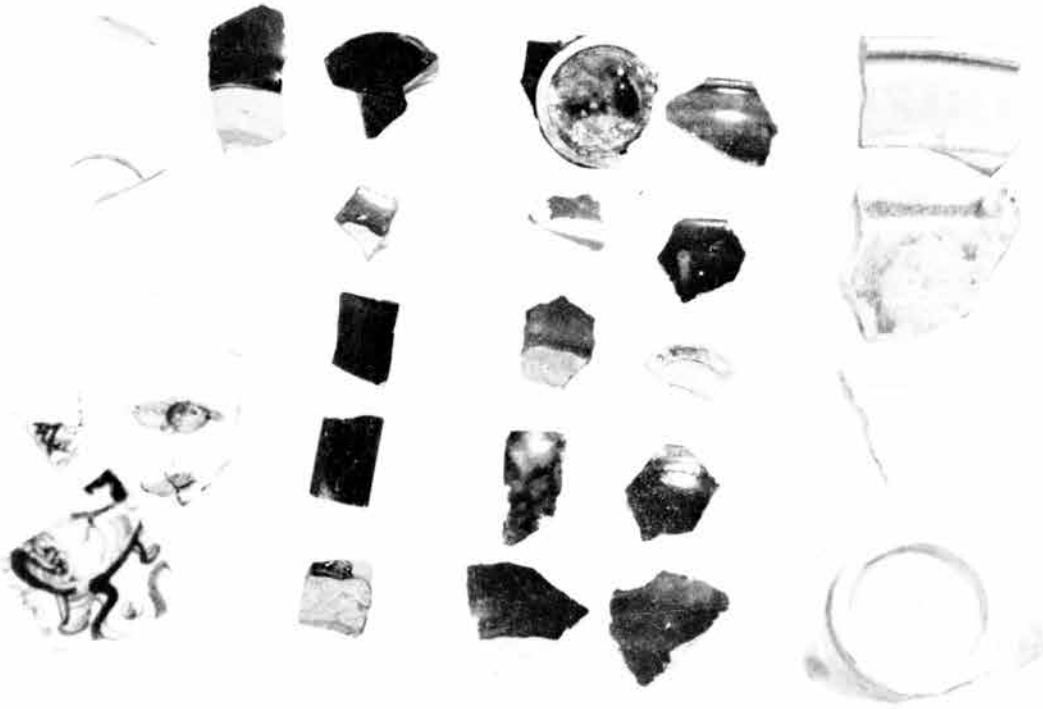


越　前　焼



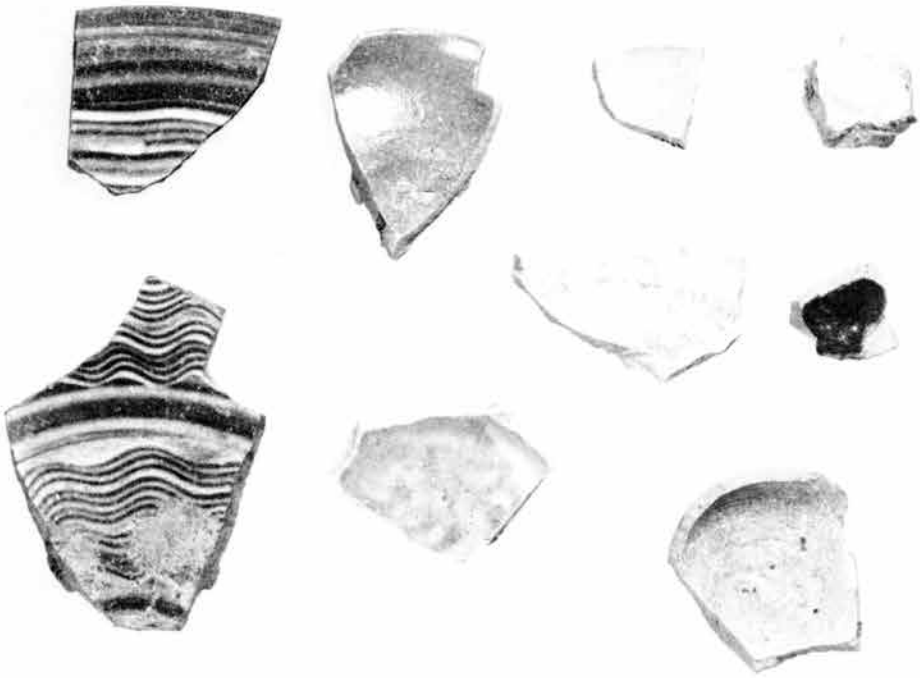
瓦　器

青　　磁



白磁・青花・天目・瀬戸の陶磁器

土師質土器



近世唐津焼

砥石・宝輪

宝輪

地輪

火輪側面

同左平面

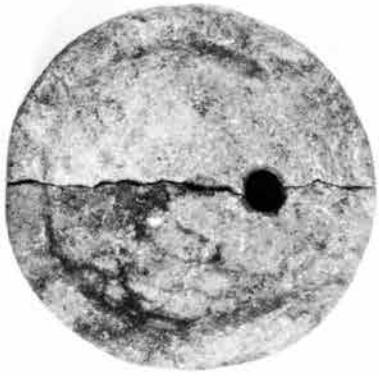
地輪側面

同左下面

石鉢

同左平面

石臼



同左平面

中世墓の発掘調査以前の状況（西から）

中世墓の全景（西から）（55年度調査）

縄文時代の集落址（南から）（55年度調査）

墓　　道（南から）（55年度調査）

発掘区全景（55年度調査南区域）

石室全景（55年度調査）

鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡

手取川水道用水供給事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷日　1981年3月10日
発行日　1981年3月20日

編　集　石川県立埋蔵文化財センター

発　行　石川県立埋蔵文化財センター

印　刷　北国書籍印刷株式会社